

187

No 0634/23

9124  
6000

二郷兵衛 今宮の心中

近松門左衛門



月見花見は何所も同じ、諸國名所のその中々に、類花の舟遊び  
 男女がござく船に袂涼し、川風は、秋と云ひても虚でないよの  
 漕出て見れば天満川、市の側なる初甜瓜買ふて冷してひい  
 は似たりや似たり燕子花、紫帽子河水に映らふ影と水汲が、汲  
 主頭と振立て、道正坊の金柄杓、あれあれ撫て通れば一撫に、は  
 樽肴、在所嫁御の里歸り、上荷で送る葬禮や、世の有様のさま  
 是常になきお肴と一とつ鞠ひる盃や、然れば船のせんの字と  
 君にすゝひと書たり、船の屋形に三味弾は納屋に油の臼と引、はしのいよ此橋のうへに  
 て賣る聲は、煙管團扇煙草入役者評判扇賣、浪花藝者の風俗と橋々名所に擬へて、書集  
 めたる藻鹽草、いせおの海士に有らねども其は、萩野八重桐と龜井橋じやとおしやる、心  
 はの、先はおたびの神あけて、断先に又續く者がないは扱、袖鴈源治は新壺じやとおしや

今宮の心中

一

る、それ何故に、鹽物町のしたゝるたる、然も藝には骨が有るといひ、桂木常世は名のと  
 じまとも、なぜくゑのころころ抱寄せて手飼に愛らしや、扱又嵐三十郎のつは座橋  
 とおしやる、心はの、何の料理に遣ふても仕出しが甘い扱、櫻山庄左衛門福鳥じやと  
 しやる、心はの、小休なれども張詰で舞臺一はいのさも有り、藝に味も有る口中のしより  
 くしたるすゞめずし、夫でたでばの何所やらがひり、とするとぞ答へける、音羽三郎三  
 と雜魚場とは、鱈が有るとの譬のや、上村吉彌は伏見堀じやとおしやる、義理はの、舟板  
 町の舟板の末には沖に乗出し、帆と充分のしるしとて今のら人や焦る、と云ふと、扱市村  
 玉がしは梅田橋と見立たり、夫何故に、はて渡れば色町越れば火屋、濡にも愛にもよふら  
 つるは扱、杉山平八と四ッ橋とは是とふじや、江戸のらも京のらも四方へ引つり引張た、  
 踏ばたのつて山村がくはつと擽げた兩足は、百間堀と思ひ出す、善悪二ツと噛分けて、り  
 くぎと糺す芝崎に思案橋と思ひ出す、篠塚二郎左と見る時は大佛島と思ひ出す、三代續く  
 奴風嵐が風俗と譬ふれば、其江戸堀と思ひ出す、嘉十郎が貌付に炭屋町と思ひ出す、猷  
 は三原重太夫、序にて作りし悪心の、切で返報のくる時は、猪喰屋橋思ひ出す、思ひ出し

く陳ね行く、先是迄が片おもて、裏の御堂もんだくと立賣堀と漕廻し、辨當濟は院家  
 具も、釜もちやくく洗屋橋、跡へはんなり入花の茶びんど橋はちちくと、寄よく  
 實際の瓦町橋にぞ着にける、菱屋介五郎は如法なる氣も丸額完爾に、申し婆様母様、此永  
 さ日の馳走ぶり亭主由兵衛とぞ草臥、暮も近し是のらお上りなされと有りければ、隠居の  
 貞法七十三眼鏡いらす杖つらす、齒は一枚も抜目なき男勝りののみ様にて、それく是  
 由兵衛、念の入た馳走でいひ思、此方の内ら出た人、店一軒の主に成り商賣もし  
 にせて、親方一家と響應とは此方ともくはいけい其身の手柄、然りながら女房が無れば、  
 人の世帯は落付ぬ、身代薬の女房と早ふ持て落つきや、左様でないのと有りければ、内儀  
 も共に打笑ひ、何故に女房持やらぬ、但何所ぞに思ひ入が有るのいひ、由兵衛思ふ圖に  
 乗りて、誠に今日はお心よふお遊びなされし忝な、其上女房の事までお尋ね、御意の  
 通り些思ひ入御座れども、此女房がいさやすみていさにくい、とふでらみ様おる様のお口  
 と借ねば参らぬと、はて此方達が云ふて濟事ならば氣も入らひで何とせよ、其思ひ入の名  
 は何と云ふ誰ぞいの、由兵衛殆ど笑壺に入り、す有難い忝ない三度禮拜仕る、名を申せ

はついで御存じ去れども、先唯今はお名とばる申すまいよのしやんく、是うらが本酒、  
 亭主のら又はじめ、憚りながら介様へ、お肴にござ殿一節頼むと云ひければ、介五郎盃  
 うけ申しの、様、二郎兵衛が法隆寺より戻つたら伴て来て、彼れが好の心中と語らそもの  
 、去ればいの切てきさが居たらば、祭文と聞ふものと、云へば由兵衛典醒顔、二郎兵  
 衛は母親の年忌に當り、在所へ参ると申したり、ささも一所に二郎兵衛と連れだつて参つ  
 たる、つがもない、ささは此比風ひいて頭痛がするとして宿へ往たと、聞さもあへず由兵  
 衛、内方も此方等が居た時分と違ひ、自墮落になつたなあ、青二才の二郎兵衛め丁稚上  
 りの分として、母の年忌で候ふとして此忙しい最中に、十里ぢのひ法隆寺へうせさまが氣に  
 入らぬ、殊にきさが煩ふて宿へ歸つた時分に、同じ様に家と出で録な事は仕出すまいと、  
 滅多無正に一人腹人も知らぬ心と苛ら、船辨慶に有らぬとも、知盛が沈みし其有様に、又  
 由兵衛がしんきともやし、舟端蹴たて盃踏わり前後と忘る斗りなり、菱屋一家の人々  
 は何の心も付ざれば、はや日も暮れた最早是のら歸らふと、上り支度と由兵衛危ないとは  
 些とも無し、挑灯用意致せしと取出せしが南無三寶、蠟燭と忘れた是久三、太儀ながら一

走り此通りの百貫町、四五丁往ばおきさの宿、定て知て、有ふぞ由兵衛が申、蠟燭一挺  
 貸てたも、些と氣色が能ならば鳥渡爰迄出たもと云て同道しておじや、序内内に氣と付  
 て誰もなみの見廻しや、早ふく合點の心得ましたと帯もせず、編絆一つの裸身や百貫  
 町へぞ走りける、昨日今日前髪取つて下手代、未だ新物の二郎兵衛おきさと深さ中入の、  
 南京綿の上へには手のない様に仕立口、在所はいなな横堀の知邊の元に隠れ居て、暮れば  
 其處へと通路の、仄に見ゆる彼の舟の屋形には、眞法様れる様、舳には安東寺町の由兵衛  
 是ならぬ、躲しませふありや何様ぞや、菱の提灯久三が持て、跡のら來はおきさじや、  
 様子が無ふては叶はぬ筈と、氣ももやくつて蒸暑さ、材木納屋に立隠れ事の様とぞ窺ひけ  
 る、ささは程なく走り寄、是はく皆様今日はお慰みと、只今久三の物語、私が氣色も云  
 々とは無けれ共、おみ様おる様へ頼み上ます御訴認事、直に是へ参りしも、ア、おとましい  
 申出來まして、一倍氣合お當りやすと、溜息吐て居たりけり、眞法も熟見て、此方へ訴認  
 の事有とは何様した事ぞ、咄して見や成べさ事なら聞いではと、左も懇切の詞の末、お馴  
 染として忝なや、昨日の暮のた三田のら私しが父親登られ、幼少時のら在所で約束しとい

た、男の姑の頼ひゆへ急に嫁入と急いで来た、此度お暇申し請け、三田へつれて歸りて嫁入さすとの申分、御存じの通り私は幼い時より大坂に育ち、手いたいとは仕付ず殊に病者な身と持て、在所の手業がなんとして、夫故當座の間に合に内方ののみ様が御懇切に遊ばし、さうこうなした若い者共數多の中、ひとつにして此大坂で物の美事に候て遣ふ、必外へ約束すなと常々のお詞、是が反古に成る物の在所へとは歸るまいと、私は申します夫では親の一分が立ぬと、云ふての親子争論多分是へ見へませふ、私が口の合ふ様に在所の嫁入とお止なされ下されと、つゞく語る下心、二郎兵衛は合點にて彼の云分は我故、男に親と見返る心中者めと、材木に抱付ぞくく悦び居たりける、親はとぼく尋ねつき、菱屋殿のお船は是の、ささが親三田の太郎三郎で御座ります、ヤア親仁殿の、それ酒進せ茶進せと、取々挨拶ありければいやお茶もたべました、定めてささめが咄でお聞きなされませふ、在所でなづけの方より、急ぐに欲いと申すにつき、中途ながら一生の身のため、道理立てお暇取れと申せば、在所へは往くまい大坂で男と持つと申す、夫は我儘親の云じよを背くのと、叱つても聞き入れず、おれが男は内方ののみ様次第に任せて有、

是非とも親のこう言に在所の男持てならば、己や死るが合點の、娘殺ると云ふ事と大聲上げて泣ます、お主のお慈悲に御意見と頼みます、在所の婿と申すも喰兼ね身代、行きとれば彼奴が果報、世帯佛法はら念佛、口に喰ふが一大事彼奴が喰ふは違ふて、大坂の男に喰付たの、やい其處な虚氣者、在所の男じや大坂の男じやとて喰ふに二ツの味なし、一人の娘に親の身でもむない男と喰ふの、親の思ふ程にもないと涙と流し恨みける、おささも流石親心思ひやれども、二世のけて交せしとも捨られず、唯のみ様のお情と頼みますると斗りにて、同じく泣ひて居る姿、貞法も不憫さに親仁の云分理が聞へた、去ながら彼のささが病者で、在所方の荒働き一年と續くまい、身に藝もないこの銀の湧く手と持つて居る、二百目近ひ給分と唯の女子にこのふり、廣い大坂に男養ふ商賣とは彼れらが職、五人三人は針一本で樂々と過す手と持ちながら、山家在所へ頼ひに往ふとは、無分別のと思はる、此談合は取わいて、ささは此眞法にとんと預けて置てたも、此方の家にも子飼の者候る者がたんと有る、能い婿取つて後々は親達も大坂へ呼ぶ様に仕て遣ふと、念の入たる割口説、由兵衛扱は彼のさささと我等へ隠居の心當、日頃の念願成就と是親仁、隠

居様へ任せて在所は變がいたがよい、此由兵衛も旦那の蔭で、安東寺町に手も擴ぶ商賣し、手代の一人も遣ふて今日の様な響應に、二兩三兩遣ふも皆親方の光り、未だ女房と持ぬはのみ様へ、とんと任せて彼方の媒妁待て居る、のみ様のお心で此方と私が嬌鼻に、成るまい物でも御座らぬなふおささ左様じやないのと、云へどもおさは胸塞り、何様やら知りませぬと打傾ぶきて居たりけり、太郎三郎一々に聞届け、おさめが申した分ではさらく胃の腑に落ませぬ、のみ様のお御意ではつき致した御尤もく、親方の候らるゝと申すに先は幸一門中、何の子細も申すまい此上はおさめが縁附は、何様なりとも最ふお暇と立んとすれば、由兵衛分別顔にて、是眞法様、是は大事の請取物おささも若い人の事、後日のもやぐ驚し、ちよつと親子に手形させ、おさが縁付眞法様のお指圖背くまい、外ら一言邪魔させまいとの手形が取たい物と差込ば、眞法打領さ、是は由兵衛が云ふ通り手形と取つて置たい、夫でも父様無筆なり明日でも私がのみ様へ手形して上げませふと辭退する程由兵衛、いやくたへと無筆でも判がなくなれば筆の軸、手形は我等筆取と煙草盆の硯引出し、はや書つける挑灯の産二郎兵衛見すまし聞すまし、彼奴が勤めて手形させ

のみ様職してささど貰ふ分別、此判させては一大事何とせふぞ、石と打て挑灯と打消してのけん、石と尋ぬる其間に手形の文言思ふ通りに書濟し、是宛名は菱屋四郎右衛門様眞法様、親三田村太郎三郎印判と云ひければ御念が入つて忝ない、私の荷が下りましたと、巾着の印判くるくと、マおささ我身も判とすや、いや私は判判持ちませぬ、左様な父が理判と、同じくすへて眞法様、いよく頼み上ますと差出せば、是では此方も如才がならぬと、珠數袋に納むる内二郎兵衛溝の石とあげ、由兵衛がけて打石が瀬板に當つて一はづみ川へさんぶと水散て、由兵衛一絞り夫や暴れ者が石うつはと、立上る所と續けて打てば由兵衛が頼み當つてあいたし是は危し、皆々屋形へささも乗つて戸と立やと、無理無休に舟に乗せ親にも早ふ去つしやれ、負傷さつしやれなと云ひけれどもいやく是は目出度、おさが嫁入の談合に石打とは吉左右、目出度御座ると云ふ小鬘にはたと當れば南無三寶、こりや何様じや目出度過て目が出たと抱へてこそは歸りけれ、猶も續けて打つ石に提灯も打破れ、由兵衛も敗もらしおささに心有る奴が、戯儀のはくか紛れない船頭船とやつてたも、久三おじや、此奴と踏んでくれふおさつしやれと上ると見て二郎

兵衛横へされてぞ歸りける、由兵衛久三天汗にて何方へうせたくと、橋へ廻れば年頃なる浪人侍、鬻奴の草履取何心なく來る所と、己奴覺へたると久三郎奴を橋へ横なげに、眞向と四ツ五ツたゝみおけてくらはする、主人是はと立歸り久三と摺んで打つけ、踏つけ、踏む所へ由兵衛駆つけ、爰にけつゝあるよふ舟へ石打つたと、摺み付く手としりとり取り、何さ石打たとは誰が事、慮外者めと云ふと見れば歴々のお侍、よく御免なりませ、人違で粗相致しました御免されて下されませ、お慈悲で御座ると泣叫ぶ何のお慈悲と捻上げ、向脚とはたと蹴返し是奴腸の出る程此奴踏め、任せておけると土足にのけ、うなよく身と打せたナ、覺へて居ると胸骨尻骨うんと踏めばぎやつと云ひ、うんと踏めばぎやつと云ひ目玉も出る斗りなり、もふよいはく、死ぬ程にしておけさ、此方へ來いと主従は優々として歸りけり、命あらく由兵衛あいたくと起上り、久三其所にの、聞へぬぞや、今の様に踏居ると見て居やる筈は有るまい、此方が聞へぬ、此方故に最前くらはされたり踏れたり、エ、振舞喰ふた斗りに言れぬ人の肩持て、阿呆くさい振舞が戻つた、御座れ戻ると立上る、チ、其方は切て振舞と喰ふたが、此方は物入ふるまふて、わけくにした

の踏れた、向後變應致すまい、御馳走が身の蔭屋、酒持つて尻踏れたと獨言して歸りけり

中之卷

本町や新物店の若衆は、女とも見へず男なりけり女子交りの針仕事、つい一針が永き世の縁の端縫しどけなく、尻も結ばぬ糸櫻綻びのゝる太甚さよ、二郎兵衛は在所より戻つた顔して二三日、仕事は常より精出せ共ささに拗強言伎言、乾反し直し上下と盤にのけて打けるが、エ、是は糊加減の悪い袴じや、よそくの人の心の様に、彼方へはひつたり此方へはひつたり、移り易い胴根性なふおささ殿、此方が頼てゐみ様の肝煎で、安東寺町へ嫁入の時、此袴と婿殿に着せたらよる、其夜お石打れて小鬘先割れぬ様に、抱締て居さつしやれいの、おささ殿やいのおささ殿う、チ、おしましい、巳や雙じや御座らぬ、是此私か仕立てる布子も、誰やらが氣によう似て、なんぼ直に縫ふても横へくといさゝる、聞分の無い物は此方に似合ふ着さつしやれ、私等が氣には入ぬと云へば、氣に入らずは打破つてのけたがよい、エ、打破つてもだんないの、夫は何様して打破る、まの此様に打破ると、雄振

わけて打盤ととんくく、何處やらの男とよそくの女と、渡らぬ先にとんくく、  
 と、んとんとぞ打にける、重手代口々にやい／＼はたへな、夫向ひの出現世のら旦那のわ  
 せる見へぬると、云ふ所へ四郎右衛門は、眼病に毒とは知れど渡世の世話、なんと仙臺の  
 注文は仕舞たる、秋田の荷積ならば今橋へ往て銀請取りや、ヤ、ト庵老は未だ見へぬ、  
 ト庵が見へたら灸とせふ女子の手が薬じや、さきに點へて貰はふし二郎兵衛に助手さしよ  
 、手のふるはぬ様に仕事しまへ、残りの者は出現世へいけと云ふ所へ、物もふ澁川ト庵御  
 見廻申すと、つゝと入ればお出の待兼ました、先是へと上座へ通せばト庵、今日は廿三  
 夜なれど一向宗はお構ひない、明日のらはつせん土用前一段とよふござる、おれ脈と見せ  
 せふ、愚老の申た通薬喰となさるゝ、うゝの脈がよふなつた、玉子とまいる願し  
 に左の脈がふはく／＼と打する、魚の中にも鱈などは大らん物、兼て無用と申したよ  
 もや喰ひはなされまい、右の脈があたまがちなは若し榎木などは参らぬ、風氣もなし點  
 と致そふ硯々と云ひければ、奥で點と頼みませふ、是ささ二郎兵衛、油火灯して艾ともみ  
 、先二三ひねつて置やと打伴れ奥に入りける、あつと云ふて二郎兵衛行燈灯しつ土器

あふり艾出して揉んとするときは立寄り胸倉とり、是れあんまりじやぞや酷いぞや、先度  
 ろら染々と物云ふ間も無い故に、心底が語りたさ傍へ寄ればびのしやのと拗強の有じやう  
 、安東寺町とは何事じや、マ、嫌らしい／＼、是なふ誰しも此方の年榮では、十六七の振袖  
 と好このむ最中に、四ツも五ツも年長の私に惚て下された、私や其心に打込で親兄弟も捨  
 たぞや、在所は生れ古郷なり両親の傍に居る物が、往ともない筈はない何の由縁に大坂に  
 、執心はなけれども此方と云ふ人に離れるが悲さに、お主と欺し親に背き身と狂はす心と  
 、可愛やとも云はずに面白そうに拗強、コ、死んで見せふの死兼は仕ませぬ、二郎兵衛殿と  
 抱きつき聲とも立す隠し泣、二郎兵衛もしはく／＼と、こらや／＼と背中と撫で共に涙と流  
 せしが、先度の手形の文言は、何様ぞ／＼と云ふ所へ、ト庵奥より立出る、マ、是はもふ  
 お歸りなされますの、されば歸らふの、まそつと遊んでやひとぎやうの相伴せふの、やあ  
 ゑいと煙草益引寄する、二人は艾拵へながら此首尾に語りたし、早ふ去ねがな／＼と  
 腕けと去る氣色なく、なんと灸行言つけは無つたの、冷麥の素麴の、なまなの茶漬位ゐな  
 らいつと戻つて寝てくれふ、内證知しやと云ひければ、ささは悦び差心得、旦那様は毒斷

で夜喰はあがらず、卜庵様へはつい茄子の淺漬で、茶漬進せと内儀様の言つけ、早ふ歸つて御寝なつたが増しで御座ると誰せども、何じや茄子の淺漬じや、一段よのらふ、夫れに出花とつけたらばと茶臼形になると見て、おきさも呆れ寧ろ泊つて御座んせと、佛頂顔に二郎兵衛艾に火と付庭の隅、卜庵が石駄の裏物は試と煽ぎ立煽ぎ立てぞ煽らする、呪咀は理外にて卜庵氣にや徹しけん、是は不思議千萬、俄に宿へ歸りたいもむ往まじよ、滅多に往たふなつて来た、へまちつとお遊びなされませ、いや、俄に往たふなつて足の裏がこそばいと、墨に足とすりつけ、降ければ、二郎兵衛石駄とちつくと直し申卜庵様、旦那の眼も直りま升灸が早ふ驗ましたと、云共我身の上とは知す、卜庵が名人御覽あれ、一炷で驗が見へまじよと足の踵のさび悪げに石駄擦せて歸る、旦那の出れぬ間に手形の文言早ふ聞たい、去ればいの文言は何様やら讀でも聞せず、宛名は菱屋四郎右衛門様眞法様、親子が印判しましたと語れば二郎兵衛はつと驚き、由兵衛めが文言と聞さぬは曲者、娘とよ由兵衛殿へ遣はさふと書たやら知れぬ、目比和女に心と盡す由兵衛め、何様こけても已奴が爲のよい様に書たは定、三田の親も粗相な、手形の文言吟味なしに判す

ると云様な、是後の邪魔とは其手形、とふぞ手形と盗んで破つて捨たい物じやと云へば、荷且にも盗むと云ふは恐い、錢銀の手形の徳徳になるにこそ、朋輩由兵衛との色づく旦那に損徳のらぬと、何時も彼の算笥に手形も置く、鍵はそこらに見ぬぬの何の爰等に置れふぞ、おる様のみ様旦那様、三人の外介さまへさへ持されぬ、何時ぞ序にのみ様頼み文言見たがよいはいの、云ふ所へ四郎右衛門なんとさ二郎兵衛、艾が未だ出来ずは向ひの出見世へいて、女房共にも擦つて貰へ、更ぬ先にしまひたいとふじや、氣がせく、あい、灸も皆出来ました、御勝手に遊ばしませ、そんなら爰で斯う向いで、それ二郎兵衛菓子益、あられ煎豆さんせうに、こゝ團敷けと捨くるりと灸のば、前々後には見へず何とせうとも頷いて、くすりくすりの灸はし痴話の便りの薄煙り、十四の灸に水が湧く盛りの女盛りの男、手としめ身と撫で口と寄せ、誰と忍ばんさしも草是ぞ因果の皮切なる、やうく灸もすへおるす主人の帯の前巾着後へ廻る紐とけて、繫ぎし鍵は巾着より半分こぼれりたりたり、二郎兵衛見つけて、算笥に指しきさに目成せ、天の與へと取んとすきさは嫌じやと手と振れば、大事ないとて頭ふる、手とふる頭ふるひく、手と出し



手と引くら猫のおきといらふ危さや、申し旦那様熱くばちと押へましよう、いや熱うは  
 ないが精がつきた、よい加減におきたい、まちつとでござんす夫最些じやく、夫やよい  
 はと鍵引出は狼狽て、はしの灸と取落す熱やく、もふく、是でしまはふ奥へ往てち  
 と寝よう、二人ながら休んでくれ能ふ仕てくれた過分なと、悪事と知らぬ土の慈悲、仇と  
 なつたる身の果の冥加に盡しも道理なり、二人は顔と見合せて鍵と取りは取たれど、主の  
 目と晦せば胸が慄ふて恐ろしい、誰ぞ来るの番しやと合せて見たる箆筒の鍵にあたるも  
 地獄の錠前と、明て捜せど衣類の外は三原の合口時代の印籠、箱に入しは蓮如様の名號、  
 合點のいぬ、手形箱は何時も土藏へは入らぬが、戸棚に入たの知らぬと常見覺へし戸  
 棚の鍵、なんの苦もなく戸と引明け捜せば一通上書に手形と有り、忝ない是が欲さの  
 狂亂と、戴きくニツ三ツにひきさき、懐中に捻込で跡しまはんと爲る所へ、門と明けた  
 は誰と、だんない者と由兵衛上り口までつらくと、蔭と見るより二郎兵衛戸棚の内へ這  
 入ば、ささは前にひつそふて由兵衛殿の、上らしやんせと後手にそろく戸棚と鎖にけ  
 る、由兵衛とつくと見澄し、旦那は灸となされたげなと、つくと上つて是やなんじや、大

事の鍵ども取散し箆筒の口も明て有る、是おきさ退や、此世間物騒に戸棚の錠は何故おろ  
 さぬ、左らば鍵も腰につけ錠とおろして置ませふ、ヤしやんとおろす錠の音、内に響  
 けば消入る心地ささはわなくくと、直に死たい計りにて前後にくれてぞ見へにけ  
 る、由兵衛ささが手とむすと取り、是おきさ、先度舟へ石打れた其疵が是未だ治らぬ、此  
 打人が知れました、今夜旦那の戸棚へ入た盗人と同人、定めて此方も助けたあらふ、戸棚  
 と明けて沙汰なしにして還の、旦那の耳へ入らう此方の心一ツじや、なんとくと云ひけ  
 れば、手と合せて頼みまする、日頃は恨も有る筈と打捨て其詞、生々世々迄忘れさせぬ一  
 生の内此御恩、何方してなりとも送りませふとれ鍵貸んせ明け申しよと、取付ば押退け、  
 マウまいこと云やんな、何時ぞくと今迄釣れたは何十度、此以前貴様が津山玄三殿に奉  
 公した時おら惚て居た此由兵衛、是非思ひと晴さふなら、和女の口へ手拭捻込で、寝る術  
 も知たれども夫は戀とは言れぬ、此戸棚が明けたくば此首尾にのいちよつと、身と汚して  
 下されちよつとと、取付ば突放し遁て廻れば追廻し、抱付く所とあた面倒なと突倒し  
 由兵衛の生畜生、文言知れぬ手形に能ふ判とさしやつたのふ、今其方と寝たらばなんじ

や戸棚と明てやらふ、忝ない嬉しい、夫が嫌さに此苦勞云ひたくば言や大事な、二郎兵衛殿と此きさと念比と仕て居る、戸棚の中なは二郎兵衛私も利は脱れぬ、靡ぬ仇に訴人しや生畜生の死畜生と、所存極し涙の体由兵衛聲とたて、さ若い衆は出見世にの、盗人が入つたぞ久三や竹は宵の口、何所に居ると呼はる聲貞法始め長兵衛權兵衛、皆跣足にて駈付る由兵衛威丈高になり、是御覽あれ、旦那衆の腰と離れぬ此鍵と盗み出し、彼の如く筆笥と明け戸棚と明し所へ、身が來ると見て戸棚の中へ逃こんだ、所としやんと錠おろした中に居るは二郎兵衛、手傳は此おきさ証據人は此由兵衛と、出來し顔の腕捲り、ささは涙に性根もなく、内外の者ははつと斗り顔と眺めて居たりけり、貞法鍵と腰につけ四郎右衛門は最ふ寢ての、旦那に聞せて兎も角も思案か有ふと有りければ、由兵衛先町代と呼びにやり、宿老殿へ報せて町中挑灯繩と棒よとひしめければ、奥より由兵衛くと、手と扣いて呼はる、あいと答へて奥に入れば、四郎右衛門小手招き次第とつくと聞届けた、子飼と思ひ肌と免し扱もく憎い奴、灸の間に錠取る、恐ろしい仕方、去ながら己が聞ては六のしい、夜中にわやく町内の外間も能らず、外へ物さへ散ずば己が聞ぬ分にして、濟し様も有

ふこと、何云ふても夜が更る二郎兵衛めは籠の鳥、其分で戸棚に置き、ささめは今夜請人の姉めに急と預けにやりや、急ては粗相も有る物とつくと分別して見よふ、女房子供が恐がらふ直に出見世に泊らしや、手代ども、向ひへ、母者人は爰へ來てお寢みなされと申し、其方も歸つて明日おじや、必ず何にも穩便に宵の中に皆寢さしやと蚊帳に入れば、由兵衛元の所に立出で、夜中に旦那のお耳に入り明病に障れば如何、何事も明日の事これ長兵衛權兵衛、太儀ながら此きさと請人の姉めとに、急度預けて直に出見世へ往て寢や、さきさ立てと云ひければ、申しかみ様参ります私身は構はねども、二郎兵衛に科の無い段は申譯の有る事、おる様へもお取成萬事頼み上まする、盗人の名と取り是が悲しう御座んすと、わつと泣出し送り行行く目もあてられず不憫なり、ま貞法様奥へござつてお寢み、我等も明日早々久三も表と能ふしめて、夜里に寢やとて出ければ欠伸と直にあくと云ふ返事、眠たき夜なる聲廿三夜の代待や、門の通りは未だ四ツ、内は靜まる燈火も心も細く更にけり、物の隣深きこそ後生願ひの心なれ、人も寢入て貞法は寢醒の床と起出て、戸棚の傍に差足し、こりや二郎兵衛いきすりめ、聲聞知たの阿呆めと、ことくと敲るるれ

ば地獄で地藏に逢ふ心地、そのみ様の恥しや、庖丁でも薄刃でも柄と脱て戸の間をら、  
 密と入れて下されませ、お馴染だけのお慈悲ぞと泣聲漏る斗りなり、死る程の性根で卑  
 しい事と爲る物のと、袖と覆ふて錠鍵の音せぬ様に戸と明けて、其所へ出かれ町人と云ひ  
 年寄の婆なれど、菜刀でなり共己が首は切て遣ふと、故意と詞とあら、るに叱られてしよ  
 ぼくと、這出る帷子も汗にひたりて、時の間に顔も瘦たる酷らしさ、流石子飼の主心叱  
 る心はわきへなり、思はず涙と流さる、二郎兵衛顔振上げ、眞法様面目も御座りませぬ  
 お主の罰と計りにてはたと俯伏し泣きけるが、御存じの通り今迄に一錢掠める我等でなし  
 、氣も遣はねども耻しや、ささと念比致せしと由兵衛めがねたにこみ、何がな見出そふ  
 くと文言知れぬ手形と書き、ささと親子に判とさせ旦那のお手に入し事、いかにしても覺  
 束なく此手形取ん爲はあり、戸柵の内て微み聞けば旦那のお耳へ入らぬとやら、何事お耳  
 へ入れずに済む様に頼み上でする、彼の眞直な旦那殿お心の蔑視が、首切るより悲しい  
 と隠居の膝と載さく、畳に喰つ泣き居たり、やれ其言譯は己が心の丁簡よ、主の腰の  
 巾着わけ屋内の鍵と盗み取り、此だいそれた言譯がでんとでもや立べきの、由兵衛が我

儘な手形とは見たれども、其場は其日の亭主方無興と思ひ其手形は、とふに破つて捨たぞ  
 やささめと、己と夫婦にして末では世帯に候んと、此年寄が苦に持たも斯う破れては水の  
 泡、何程慈悲がしたふても理と非には任られず、目の明ぬ主と由兵衛などが言立ては、朋  
 輩共も氣がふれて跡で人も遣はれず、己に不憫もかけられず、思ひ切てささと由兵衛にや  
 れ、時には四方圓くなり其方も茲に勤よく、主の恩も送らる、己が心持次第、池田の姪の  
 中にては女房には事のぬ、ささと遣るの何様するぞと、我子に意見とする如く叱つ泣つ  
 割口説、二郎兵衛も唯泣入て、暫時返事もなかりしが、一々のお詞聞入れぬは、畜生に劣  
 る二郎兵衛なれども、あつと申して御恩はよも送るまい、元服も致したものと丁稚よりな  
 と押下て、差でもない事言立踏ぬ斗りに擲たさ、虫でも堪忍なりがたき無念と凌ぎ參  
 りしも、お家のお影で一日もささと一所に住居とせば、由兵衛が面と踏返した同然と、思  
 へば今日の奉公も心まめしう更した、やみくとささとめと渡し是や見たのと云ふ面が見て  
 居られぬの口惜や、さふも私は堪忍まいと無念涙は目にあまり、袖と喰切り我身と掴み身  
 と裸はして歎きしは、心底道理にむざんなり、いや申す程お主の慮外、兎に角元の戸柵

に入り彼奴が致した通り、錠とあろして下されませ直に籠へ参らば、是今生のお暇乞御恩と報せぬ段は御免有つて下されませと、這入る所と引出しやれ思知らずの物知らずと、腹立涙の隙よりも十二の歳より飼育てし、二郎七の昔忘れたる、三日にあげず煩ひて迎も用には立まじき、去せくと人毎に言ぬ者もなかりしと此婆一人じやうとはり在所へ戻さば死るは定、眞の慈悲とは此事と十八の春まで、呪咀よ薬よと孫子にもせぬ世話として、四郎右衛門も物入させ、やうくと人になし、朋輩共も嫉む程人に勝れ目とつけしに、籠ひつに入る時菱屋の婆が阿呆盡し、盗人のひたて親方は眼病なり、身代あけるも知ぬと四郎右衛門まで誹せても、己が一分立てたいな、御堂のあさじ参りにも、女子共起して苦勞あけては後生にならぬと、己斗り伴しに明日より朝日に参られず、願ふ後生も願はせぬ浅まし氣が附初た、此家に馴染ば犬でも猫でも貞法は酷いめが見ともなく、可愛さにこそ口たけ、此上にも我と立て己が情とじやうあたて、死たくば戸棚へ入れと泣つ感しつとまくとに慈悲心余る涙の意見後世に入たるしるしなり、二郎兵衛聞き入れてやゆ尤もく、今合點参つた、思切て由兵衛にささと遣りませふ、夫が定ふら誓文立て、來月は母の

七年忌、此頃取越致した此母と、奈落に墮しませふと跡先知らぬ誓文の、ひとつは罰も當るべし、出来いたく此家久しい重手代、由兵衛と張合て勝て負と云ふ物、何事も貞法が美しう濟して遣ふ、二階へ上つて最ふ寝めと戸棚の錠前しと、あろし阿呆めがおひびの斗りが女房の、彼の様な洒落者より、おひくむくくの手いらすと抱せふぞ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛とて、奥に入る心殊勝に哀れなり、二郎兵衛夢とも誠とも氣もうつとりと成りけるが、左もあれ彼の手形隠居の破つて捨しとや、今破つたは何じや知らぬと取出し、合せて見れば南無三寶、七貫五百目上本町の家質の手形、此晦日に元利残らず相濟む筈、アツアツはつと明たる口も何に塞がん身の罪科、一災起れば二災起る、雨雲の空恐ろしく、よるめく足元判の破れと引寄せて、合せて見繼で見繼に繼れぬ命の難儀、とふも生ては居られぬ死るとも生るとも、ささは離さじ離れじ物、先此家と脱殻のひよろつく足と踏留めく、表へ出る中の間の合の戸密と明ければ、竹が蚊帳に丸裸身蚊と焼く紙燭めいくたり、エ、邪魔な爰と通らば咎むべし、如何せん何と扇子の一煽ぎ、はつと消れば、悲し憎の風めや火と消した、今夜一夜は蚤と蚊に此肌と手向るじや、あつたら物と久三でも

おじやらいで、二郎兵衛殿とおきと殿挨拶見れば美山しうて耐らぬ、此方も盆には在所へ  
 いて、あは畑でしげると、ころりと寝たる音斗り鼠の聞はあやなしや、漸々と門口の貫の  
 木堅き家の風、鍵は久三が預りにて、朝比奈ならね門破り詮方つきて立居たり、預けら  
 れたるささが身の出ては姉の迷惑と、知れど夫の懐しさと、分て別なき割菊の紋の風呂敷  
 引包み、菱屋の門口樞の穴覗いても音信は、蚊の聲ならで便りなく胸臆死して泣聲の、内  
 へ微に聞ゆれば二郎兵衛も樞の穴、顔と寄れば鬘の香の梅花の薫はおきささの、おいの二郎  
 様の、語りたし事斗り爰がとふも明られぬ、此戸一重が關守と互ひに身とすり氣と踏さ、  
 泣くより外の事どなき、浪花橋の辻に寝し犬一疋吠ゆる、聲につれて方々より七八疋、  
 ささど威して吠立る、恐ろしなんども詮方なく、放れがたなく門口に猶取付て立たりしが  
 、中の間の竹目と醒しあれ久三門にいふ夫が啼く、何も無い起て見や、おふと答ゆる  
 寝聲の返事、夫やこそ久三とささは東へ、二郎兵衛は中戸の影にぞ隠れける、久三は例の  
 緋絆一ツ桿棒提げ貫の木明け、耳門開いてつと出で、なんにもないもの非人がな通つ  
 たる、来い〜〜と呼ば犬共尾と振ゆる、蒸暑いが外へ出れば極樂の西風、そ、そ

ないと涼む間に二郎兵衛、積重ねたる染地のひの絹、壹反解いてくる〜〜身も頭も真  
 白に引包み耳門とぬつと飛出れば、なふ悲しや幽霊じや、幽霊よく〜と迷こみ門口はたと  
 鎖す、危なや地獄極樂塚と筋のらはれ爰と、招かれ寄りて何事も先此近所と退いての事、  
 あては無けれと南の方人や咎めんくる〜と、絹とも包む世と包む、其風呂敷の木綿巾身  
 のなり果てこそ

二郎兵衛おきと道行

下之卷

一ツとやひとつ涙の灘の糸落ちて三津の川となる、二ツとや筆もあれし我心書て後世に  
 留めたや、三ツとや見たや聞きたや故郷の親の生顔夢にだに、夢さへ見せぬ死での夢醒て  
 はいつこの此娑婆へ、歸りこんどの敷入は女夫連でと約束の、盆正月の十六日と待ち樂みし  
 我々が、哀地獄の釜の蓋開と待べき罪人と、呵責の責はよもやその、愛しいこなた可愛そ  
 なた、脱すまいぞや脱さじと縋り抱よせ泣姿、咎めて吠犬の責此世に地獄見せけらし、是  
 も思へば親の罰私に親よりお主の報ひ、育てられたるお情けや後生願ひの親方の宵にや和

潜夜中にや念佛、早真夜中の月しるの空と力に東堀、澄行水に影映る我身の濁り耻し、耻  
 は暫しの浮世なりとも戀とする身の手本町とは、二人が心ひとつに米屋町とも思ひ計りて  
 彼生七生助ある、おれが殿御は日本おろのよ唐物町にも、稀な男のちよきりこきり小女房  
 、花の様なる和子設けて、久太郎町とてやがて寺入久寶寺町、其豫言もいつしうに空寝の  
 夢の馬喰町、誠私もこなさんも後には親ののれ残る、老木の老の世はさのさ文に願慶町  
 も空ごとや、安東寺町も子故の間に迷はせません不孝の罪何と脱れん淺ましと。又引よせ  
 て泣く涙袖にさし來る鹽町や、長あらぬ世に長堀の樂な世界と心あら九之助橋や是やこの  
 、瓦屋橋とや油屋の油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松はいつの時雨の一車洗へど  
 落ちぬ戀衣、世にひろがりし浮名とよそに謠ひしことの葉や、其油屋の一節も臘月油が身  
 の上に懸る涙とこぼれそひ、明日より同三味線に法の灯し油屋の回向となすこそ哀なれ、  
 ひとつ有さへ惜き世に今宵限とはりづめや、命二ツと二ツ井戸深い縁とて死にたいも皆罪  
 障の大和橋、あの千日に立つ煙無常の雲のさつき雨、降ぬ先にと死に場尋ねて露にしみつ  
 く帷子、肩と裾とはおぼる花色腰に弘誓の舟に帆掛て、妻に磯馴の松原是と最期に京橋や

ら西に川口舟の帆柱、此處に惠比壽の松原松のくるみの雨雲の、降らぬささとして道急ぐ早  
 曉の旅人や、死に行くものよは知らいで人の浮世渾口曲もなや、知らいで人のよは知ら  
 すや人の浮世念佛も頼もしく、傾く月と知る邊にて空と拜めばおちるたに、とるくくと  
 遠くなるよの海のと聞けば、あれくよそに轟く雷鳴の落ちるる共、我妻と避て涙の袖  
 おほふいや我は男よそなたとと、互に覆おほはれて今死ぬる身も生身には、目に恐ろしき  
 稻光野なの水に飛ぶ螢、御堂の影はまがはじと歩みよろしく足たぬ惠比壽の森にぞ着  
 につける、二人は松の下蔭にぞうと座と組み泣けるが、男は氣弱若者、こ譯もないことした  
 はいの内に居る時はしりのさきの菜刀でなりとも一人死ねば能いものと、死ぬるに連と拵  
 らへて旦那には事欠せ、家の名と出すと云ひ、女房の親兄弟に難儀とける大肝やつと、  
 死顔とまぶられ日頃立てた正直も無になり、よしない者に縁ふれたとそなたも世間の評議  
 にあふ、許したもやと斗りにて涙正体なありけり、なふ死際迄其様に私が事思ふての  
 嬉しう御座る忝いと供に打伏泣さけるが、左れども夫は愚痴じやぞや格好こそは大ぐれ  
 なれ、昨日今日の前髪と姉と云ふても大じないささめが醋や殺したと憎みは我身一ツにて

其處は露ちりいとほね共世間晴て宿小屋持、若い衆のつき合ひに老女房持つたとて、人が笑うが譏るふる此兩の手の有りたけは。命限りに稼き出しまあ十五年辛抱すれば、こな様は三十六私はちやうと四十一老女房のゐとくに、男に家を買せたと譏りし人にうらやませ男にひれと付ふぞと、思ふたこと云ふたこと違へば違ふ現世さへ未來は猶らし覺束なや、中有の旅の雲さりに見失なふと有る共犬死と思ふて下さるな、六道の辻にて必巡り逢ふぞや、とんでもないこと醫畜生界に落ち、虫けらに生るゝとも同虫と生れふと思ひ語たうつめました、左は去りながら何に成らふも知らぬ身の人界の見とさめ、ま一度顔がよふ見たい私も見たいと引よせ、我故殺すの女房故に死なしやんすの、愛しぞや愛しいと盡させぬ悲さひぬ思ひ、思ひ亂る夏草のしほれ伏てぞ泣き居たる、あれゝ夜明も近付ららゝゝ人の通ひも有る二人が帯と結び繼ぎ、云ふた通りと解んとすればいや帯と解ては見るしうらん、此絹は親方の商ひ物盗みはせぬ共、斷り云はねば盗みも同然、是と此木にもはへ付け旦那の絹にて首くれば、旦那の手にゝるも同然、一ツの罪や脱るゝと昔の例求察、是も男と女郎花それはくねる是は又、うねりし松に手と探て渡るも

夢の浮橋や、無明の橋の最細き心の罪に踏滑る足と踏しめ、踏しめしても上り煩らふ男の体、女子の身でさへ上る物は是やとふぞいのと手と引ば、二郎兵衛涙とはらゝゝと流し、主の罰の恐ろしや此足袋の片足は旦那のお古、常は兎もあれ此時は頭にも戴くはづ、土足にのけし其詰責お許しなされ下されと、脱捨て登る松が枝にそりや雷光鳴ふぞや、吃驚して落まいぞと夕立頻る雷神、目指も知らぬ松影に何やら暗ふて見へてころ、慾深い事ながら貌とよせて下さんせ、雷光の影になりとも顔が見たい見せたいと、くはつと光ればわつと泣き、叫ぶ聲々雷神も思ふ中とばよも裂ぬ、涙の雨に二重三重締つけ、二丈の絹も我々が一ッ達は一丈ぞ、往生淨土は一寸ものへも締めもさよいら、首の結め生々世々解ぬ契りの堅結び、まもふ物は云はれぬ云ひたい事は御座らぬの、和女は無いら私は父様母様が懐しい是尋り、我はらみ様旦那の事、云て盡せぬ此外は唯南無阿彌阿彌佛はつらりぞ、唯今が南無阿彌阿彌佛く南無阿彌阿彌佛と踏はづし、落る袂と引き寄せて抱き附ても苦みの、寄りては離れ離れては足と締め手と伸し、虚空と摺り臨終の互ひの目には見へながら、物は云れず岩代の松にゝれる下り藤、鼠になやむ如くにて次第くゝに駈り果て、消行く星

と諸共に一度に息絶へ目と塞ぐ、桁丈揃ひし死姿刃に伏すは古手にて、これ心中の新物と聞く人回向となしにける、

今宮心中

最明寺殿百人上臈

近松門左衛門作

周書に曰く國と治むるに三常あり、一ツには君賢と舉ると以て常とし、二ツには官賢に任ずると以て常とし、士賢と敬ふと以て常とし、合て三ツの鱗形北條五代の鎌倉や、時の時たる時頼の執權の代ぞ私なき徳と隠して權貴に誇らず、祝髪して最明寺殿道崇と號し、名越が谷の法華堂に古右大將頼朝卿の尊影と木像に刻み奉つり、大江の僧正廣辨と別當に請じすね、莊嚴禮典在すが如く神易と名付六十四本の御圖と込め、凡國家の政道に誤り有や無しやとて、我身と御圖に試みて正たまへる賞罰に、天地自然に偽りの無き世なりけり村時雨、冬至の日と吉例にて翌年の政所始め、御嫡子天女丸時宗十六歳、御舎弟式部の冠者時定廿三歳、其外連署昵近の歴々法華堂に群參あり、錦の戸帳開れば各々はつと頭と垂れ生るに仕る如くなり、大江の僧正太祝たてまつり、御圖の御箱押越いて千早振、正直路の御圖の文讀上げてこそ講じけれ、夫千里の地と得るは一賢人と得るには如す、千金と連ぬるは一賢人と求るには若すと云々、此文の意は假令は大國と隨へ万寶と求めんと思



最明寺殿百人上臈

は、先臣下の賢者を求むべしとの御知せ目出度御聞候と、考へらるれば最明寺殿聞給ひ、我も兼て存ずる所、臣等が心君の冥慮に相叶へり、然らば建曆以來御勘氣謀犯の輩の上り屋敷の明地多し、當代忠勤の方々へ分ち與へんそれくと、中原の大外記執筆にて仰に從ひ記しける、先切通しの梶原屋敷は海と見晴し山に添ひ境内分に過たれ共宇都宮の新庄司友平に恩賜ある、之はこれ父友綱が梶原と射留たる舊功、且は其身も學問好み記録と集め文武の嗜み行跡道と守るよし、外を勵まし徳と勤むる御褒美として、向後若君天女丸殿御師範にこそさ、れけれ、葛西が谷の佐々木屋敷そも此佐々木兄弟は、高名諸人にぞつはすと雖も、譏者の爲に没收せられし分地なれば先祖の忠節御感に堪ず、佐々木の十藏廣綱に給けるは故郷に飾る唐錦、さぬばり山の文覺屋敷遠藤四郎に給まはる所、天輪の盛長屋敷は結城の友重、妹脊川の蒲殿屋敷は稻毛の彌五郎雪の下の長明屋敷、當代和歌に名と得たる河内守光行が光源氏の講釋場、今ぞ風雅の道までも色と上たる紅が谷、佐野の源左衛門常世が屋敷は花すき者の跡どとして若君の御花畑御休息所に給てけり、筋違橋の秩父屋敷亦橋左衛門所望の所、比企が谷の土佐坊屋敷は金田の頼次、松葉が谷の佐竹屋敷は城之助保

盛、藤が谷の大伴屋敷兼て足利望みに應ず、天神山の荏栲屋敷は仁科の前司、小林郷の朝比奈屋敷、伊井嶋の景政屋敷三浦の光村泰村に給つたり、袖の浦の靜屋敷月影の大佛屋敷稻村崎の大介屋敷は平の宣時秀時、安藤左衛門光成其外とりう、二男で分に應じ功に依り住宅の地と安堵ある、實に廉直の法政やと各々隨ひ靡さける、最明寺殿悦び給ひ如何に天女丸來春よりは汝とも政道の連署に加ふべし御影に御禮仕まつれ、畏れまつて引繕ひ資前に差向へばどつと身の毛もいよだつて忍辱柔和の佛眼も、睨ませ給ふと御影の御顔二目とも拜まれず、頭の上に大盤石の落のつたる如くにて、眼も暗み俯伏にうつばと伏し給ふ、人々周章抱退け看病すれば氣も爽やぎ、顔色もとの如くにて不思議くと言なり、最明寺殿驚き給ひ扱は神君の御内性に叶はぬと覺わたり御園に伺ひ奉つれと、僧正やがて神咒と唱へ御箱と振上振立て御園の文と拜誦あれば、豆と煮て豆の豆殻と焚く烟たぬさること日月の千回と讀も終らずあらず不思議や、此文は兄弟の中不和にして恨みありとの御示現、此に付て愚僧常々考へ置しに疑ひなく、天女丸殿こそは九郎判官義經の再誕候、其所謂は判官殿は丁丑の生れ本對帥の對に當つて軍術に妙と得、中秋なればの誕生際と征する懸官

最明寺殿百人上臈

向齒そつて猿眼びんの髪かみの縮ちぢしとや、若君わかぎみの本封支干御誕生ねんげつとくげんたんとせうの年月刻限ねんげつとくげんたんとせう面跡骨拵おもてあとほねぐしら分相ぶんさう違ちがなき上に只今御影ただいまごかげの御怒ごいかり彼是かんがよ以て考れば、若君わかぎみの前生ぜんしやうは義經よしつねに極きまつたり、尙其なほそのしやう驗しんする  
 御覽ごらんじ合あはすべしと、三世命鑑理せいめいかんりと照てらし鏡かがみに懸かけて説給とまへば思おもひ合あはせて人々ひとはあつと手てと  
 打ち給うちたまけり、僧正そうじやう重ねて承うけたまはれば奥州おくしうの田夫者でんふしや、鎌倉殿かまくらどのの御勘氣ごかんき謀犯人むげんじんよなんせとて  
 、義經よしつねの御墓ごんぼと馬うまの飼場かひばと踏荒ふみあし、刺ささへ頼朝公よりてうより錦戸にしきどに給たまはりし判官誅罰はんくわんしゅつばつの御判ごはんの御教ごけう  
 書國中しよこくちゆうに口くちすさみ御ごんのばねと辱はづかしむ、早はやく御使者ごしやと遣つかはされ彼の御判ごはんと燒やき捨て、おん墓ぼと清きよ  
 め尊たつとみなば御勘當ごかんたうのしるしも失うせ判官殿はんくわんどのの魂魄こんぱくに天然自在てんねんじざいの御威光ごんくわう、いや若君わかぎみの御身ごんみに顯あら  
 れ智謀ちぼう計略けいりやく軍術ぐんじゆつ劍術けんじゆつ輕業けいごう早業さうごう、武勇ぶゆうの達者たつしやと成給なりたまはん、其時そのときころ義經よしつねの生變なまればりと著いちじるや  
 、愚僧ぐそうが繰くたる命鑑めいかんの易やす、おん疑うたがひも晴申はれさんと、見通みとほすごとく陳のらるれば實じつに左様さやう  
 の例たのし多おほし、然しからば二階堂にかいだう入道にやうだうは奥州おくしうに下向げかうし、義經よしつねの御墓ごんぼと祭まつり同じく誅罰しゅつばつの御教書ごけいしよも  
 召返めしかへして燒捨やきすつべしと仰おほせと受うてぞ退出たいしゆつす、斯かて最明寺殿御影さいめいじやうどのごかげの前に進まみ出いで、扱さつ方かた々に  
 申渡まをす仔細さいじゆ有あり、近ちかふ寄よりて聞候きこへ、抑我おほわが先祖せんぞ北條ほくじやうの四郎時政しじやうじまより、義時よしとき泰時たいじ打頼うちたのき六十  
 餘州よししうの執權しやくけんい、此御影このごかげの照覽せうらんに懸かけて政道せいだう私わたくししなしと雖いへども、遠國えんこく波濤はたうの末々すくなく民たみの盛衰せいさい、國くに

主ぬしの邪正じやせいは見るに難かたく聞きこと遠とほし、唐土たうどの大祖皇帝たいそくわうていは、感王かんわう道だうに獨御幸ひとりごゆきのためしむわり、  
 頭陀修行だうたじゆぎやうの身みともなり諸國しよこくの安危あんきと見みを欲ほく思おもへども、斯かと世上せじやうに披露ひろせば、諸人しよじん僞いつはりり諛う  
 りて誠まことの善惡ぜんあくしり難かたし、されば此方丈このほうじやうの床ゆかとしつらふ事餘ことよの儀ぎにあらず、上宮太子じやうぐわうたいしの身みは  
 夢殿ゆめどのにありながら、魂たましひは震旦しんたんの天臺山てんたいさんに逍遙せうぎやうあり、我われも年月としつき學まなびたる坐禪ざぜん三昧さんまいの力ちからに依よ  
 て、此方丈このほうじやうに閉籠へいろうり觀念くわんねんと疑うたがひ、身みは鎌倉かまくらの法華堂ほつげだう、一心しんは秋津洲あきつしまの浦々うらら里々さと巡見めぐみすべし  
 、其間そのあひだは弟ていの式部しきぶの冠者くわんじや、天女丸てんにょまると心こころと合あはせ、貞永さだながの式目しきめと守まもつて政道せいだう怠たるべからず、  
 僧正そうじやうの外ほか此所案内このところあんない禁制きんせい、坐禪ざぜんおはりて僧正そうじやうの便次第べんしだいに迎むかひに來きたれ、追付おつつけ目出度めだう對面たいめんせんと  
 禪場ぜんばうの戸とと引立ひきたているさの月の影かげ暗くらく寂寞せきぼくとして音ねもなし、若君わかぎみと始はじめ諸大名國家しよだいめいこくがの爲ためと  
 ある上うへは兎角うしかうやわけ難かたし、去さながら給仕たまへ申者まをもなし万事ばんじ貴僧きそうと頼たのみ存ぞんじ候まをと、始終しじゆうの約やく  
 束細そくさい々と皆々みな本所ほんじよに歸かへらるゝ、兼かて僧正そうじやう只一人ただひとりに示しめし置給おきたまふもゑ、旅たびの物ものの具取ぐとまゐらひ  
 何れも歸宅きたく候まをてはや夕霧ゆふきりの暗紛くらまれ御旅立ごたびだちあれしと、訪問おとづれ給たまへばあら嬉うれしや數年すねんの望のぞみ  
 達たつしたり、來年らいねん彌生よひすけつゝた立歸たちかへるまでは我われ此許こゝにありと沙汰さたし給たまへやと内うちより扉と押開おしひらく  
 、花はなの袂たもとと旅衣たびころも笠かさより外ほかは宿やどなく、苦くと敷しき寝ねのひら包つつみ金軸きんじやくの普門品ふもんひん、したんのさすが矢

最明寺殿百人上臈

六

立の筈百八の菩提珠ならで、御身に添る物はなし憲清法師が世と遁れ、修行の肩に懸たるはやどしき鳥の歌袋、此は浮世の人心ゆがみと矯て竹の杖、月諸共に我も又世上の闇と照さんど、慈悲の眼の衣手や民の草葉に窺れ給ふ御有様ぞ有難き大學の道明德と明るに生民と受し天女丸御同學には佐々木が嫡子花市、土肥の乙鶴金子の十九皆物讀の御伽にて、朝は武藝定つて、晝の時計と宇都宮の屋敷に通ひ給ひける、今日のお供は上野の國の住人佐野の源藤太經景、若君の御出なりと案内す、友平立出で學問所へ伴なひ参らすれば、若君と始め何れも行儀繕ひて、面々書物ひらへらる、友平若君と情々と打守り、扱々御器用千萬誠の聰明睿智とは若君の御事、夫に依て御伽の子供衆まで我劣らじと覺ゆ強く、小學入り日數もあさに四書古文三昧詩、錦繡段此上に遊ばされんは五經文選其外聖賢の經書詩文の書、限りなく候へ共夫までに及ばず、弓馬の家には孫子吳子三略六韜司馬法などやして、合戦勝負の理非と述べたり、七書と能々御得心あり、兼ては史記と御覽あり古人の心と味ふと、弓矢探る身の學問とはやなれ、大江の僧正廣辨が三世命鑑と考へ九郎判官義經の生れ變りとやされしに夢々疑ひ候はず、末頼もしき御器量いよく文武の御嗜みこそ

肝要なれ、夫に付て先物讀みの始めには、實語教童子教和漢朗詠菅家往來、扱は判官殿の腰越狀お家の式目、是等は諸人存じの書、茲に未だ流布せざる秘傳の一卷、是と御傳授致さんと算笥の底より取出し、是は若君の御生判官殿、高館にて御生害の時一期の遺恨と書願し口に含んで失給ひし合狀とやもの、文法やはらうに候へ共無點の物に候へば、一遍教へ奉つらんと押開けば天女丸、扱は我生れぬ先の筆跡のと、見ぬ世の昔なつかしく涙と聲に浮べながら同音にこそ讀れけれ

義經ふくみ狀

抑々義經末期に謹んです、苟くも清和の臺と出で、多田の滿仲の家と嗣しより此のた、繼父清盛に隔てられ邊土遠國と住家とし、土民百姓等に伏仕せらる、然りと雖ども當家の御運と開き勅宣の其一に撰れ、或時は野に伏山に伏又或時は漫々たる海上に風波の難と凌激徒の首と切て鯨鯨の願に晒三年三月に責摩け大臣殿父子と生捕京鎌倉と渡、源氏會稽の差辱と雪ぐと雖ども、梶原が讒言に依て空しく莫大の勳功ともたされ親と兄弟と僅の士一人に思召のへらる、只是不運と存ず將亦前世の業因と感するに似たり、仰ぎ願はくは梶原

最明寺殿百人上臈

七

最明寺殿百人上臈

父子が頭と刎ね、義經に手向られば今生後生の恨みあるべからず万端筆紙に盡し難し、恐惶敬つて白す、文治五年閏四月廿八日謹上録、倉右大將殿義經と、讀も終らず若君涙に咽び給へば、同學の少年まで皆々袖とぞ濡しける、友平涙と押へ、誠義經の御遺物斗りにあらず末世の教へに成べき物其仔細といつば、頼朝程の御大將梶原が奸曲に誑のされ、實否と糾さず御舎弟と亡し給ふこと、火の中にある實に愛て片手と焼くに異らず、されば大將としては先よく人と知べき教へならずや、又梶原は君の寵に誇て己と忘れ、一旦の利に眼くらみ人と害すと思へ共、却つて我身と害すること、天に向つて唾と吐すと四十二章經には説れたり、扱こそ頼朝公御逝去の後、安達の景盛と頼家公へ讒言し、結城の朝光と尼將軍へ讒奏申ける程に、頼朝御存命の間こそ諸人敬まひ恐れけり、年來疎む梶原父子何に心と置べきと、和田小山島山三浦の義村千葉之介八田小笠原藤九郎盛長以下の御家人十六人、鶴が岡に會合し景時が罪五十餘ヶ條、連判の訴狀と認め因幡守廣元と以て頼家公へ奉つり既に誅せらる可に極つしるは、猛威と振ふ梶原が日頃の辨舌辨口も、矢筈の紋の矢も楯も大勢にたまらばこそ、星月夜の編笠や鎌倉山と夜脱にして相摸の國一の宮へはう

逃て隠れしが、はやりにはやる我武者ども餘さし者と在々所々、手ひどく殿しく追索され、鵜川の小鮎鷹に雉子、猫に追れしもの鼠あな淺間しや梶原父子、郎等下人も散々に馬に乗ても舍人なく、鞍は置ども鎧は挿す都の方へと心ざし、駿河の國と驅通る代々我等が本國なり、父彌三郎友綱一族集め小的射て勝負と樂しむ期の前、御免も乞す乗打す、友綱弓と矢採て打番ひ大音上げて、梶原殿と見懸たり歩立にて通るにも的場には故實のそふ禮義もなしに乗打は、斯云ふと宇都宮と知すになせる慮外あり、よし知ば知にもせよ朋輩の情に人と人は赦しもあれ、弓矢に向つて乗打は正八幡の神罰の矢受て見よと白木の弓、大中黒の的矢術鏑懸て引絞り、驅行く駒に拳と付け絃音高く切て放せば、誤またず後に乗たる嫡子源太郎が押付と胸板へぐつと射抜て餘る矢が親平三景時が耳の根と肩先まで喉笛あけて射通され親子一所に馬上より、左手右手へ遠近の人の鬱憤世の遺恨此時にこそ晴てけれ、父友綱が其時の御恩賞の餘慶に依て、此梶原屋敷と今度某拜領し、土砂改ためいへ共那れにい紅梅の早咲こそ、景時が二度のわけの赦の梅の名残として、植置たると承はる、末の世の標しに引残しゆが、折々雨の夕暮などは梶原が一念の火、梅の梢に来るよし下女

下郎なぞが申しふらしいへども某は遂に見ず、如何で左様の事あらんと、語り給へば人々もあつと感じてお在ます、佐野の源藤太経景次の間より罷出で、好き時分お御供致し若君のお蔭に依て、御講釋承たまはり我等の仕合せ一代の徳、扱々梶原めは武士たる者の風上にも思たる者、其時節経景生れ合せ有るならば、譏言吐出す舌引ぬき總骨引裂、踏躑つて退んずものエ、四十年遅ふ生れたなめ、那の紅梅が梶原梅の何の彼奴が籠の梅、二度ののけも半分虚言輕薄らしい花の色、悪い梶原めがしやつ面踏で呉んすと、廣庭に飛で下り股立掴んで古木の梅の枝も折よ根も摧けよ、どうくどうくどうくと踏付け、拳と揚て打やうつばのはつきと折て、落花頗る狼藉たる、チ、さもそふす景時と、雑言吐て立歸れば、挨拶なくも人々は苦笑にぞ成にける、時しも牙行く時雨の雲の雪と催はす空凄まじく、山風落葉と吹立く吹上れば、紅葉天に翻翻して火烟の渦巻如くなるに、梶原が觸體虚空に閃めき舞下り舞上り、源藤太が響りに確然とこそは喰付け、され共人目に見えざれば、其身はさしも尙知す心も元の心ながら、氣は逆上し酩酊と酒に酔るが如くなり、斯る所に安藤左衛門光成方より急々の御注進使者と走らせ候と、大息吻て伺候する若君驚き、其使者

是々急々の注進とは何事やらんと曰へば、さん候御叔父式部の冠者時定殿、御家の重寶三鱗の御旗と奪取、本國伊豆の岬へ押渡り給候、勢全く逆心の御企てと見ゆい、大殿坐禪に御籠りの内と申、延引にては御大事たるべし、屹と御征伐しあるべしとの注進なりとぞ申しける、天女丸横手と打てこは如何に、其旗といつは先祖時政に、江の島の辨財天直に與へ給つたる、三枚の鱗と旗の紋と勸請し、守とも賢とも是で立たる北條家、叔父は一家と云ながら庶子へ渡さん様はなし、しや何事の有ん伊豆の岬は叔父の、鬼界高麗契丹國雲の果て海の果て、陸ならば駒の蹄の立限り、海ならば櫓櫂の立んす所まで責寄せく取返さで置べきの、天女丸時宗が鎧始めの初陣に叔父の首引提すんば鎌倉へは歸るまじ、山路と廻つて人馬の足と勞らすな、由井の濱より兵船出し、只一時に揉潰せ、馬に鞍置け物具せよと勇み進みし御有様實に義經の再調と札と打さる計なり、梶原が死靈に侵されし源藤太進み出で、此度の先陣は此経景が給はつて眞先驅ふするにて候、仰付けられ候へところ望みけれ、若君聞も取すイヤ先陣も後陣も此時宗が無くばこそ、先陣は某よ、いやく殿は大將軍是非先陣は経景に給はれしと詞と返せば、いやとよ大將軍とは父最明寺殿な

らで外になし、我も汝等同然よ高名は仕勝ぞよ、親にも子にも遠慮なし、急げや急げ早ければ待こと有て静なり、遅くて走る道は物憂しと名將の詠しぞのしと口吟み出給へば、源藤太御袖と控へ然ば今度の御船には和蘭櫓と立申べし、ム、ウして和蘭櫓とは何ぞ、さん候馬は乗手の心に任せ引も驅るも自由なれ共、すはや引んと思ふ時船押廻すに儘ならず、不覺の負と取物に候、臈袖に櫓と立進へ脇腕と入れ何方へも廻し易い様にと云せも敢ず、エ、門出悪し思々し、一足も引じと思ふさへ引は軍の慣なり、兼て左様の逃用意、憶病神の未社殿と笑ひ給へば、同學の十四五の輩らまで手と擲いてぞ笑ひける、藤太大きに赤面し、總じて武士は進退と辨まへ命と全たふして敵と亡ぼすと以つて好き弓取りとは名付けたり、和殿の様に口廣い癖に、尾の細いと鮫鱈武者とて何の役に立たぬもの近頃笑止笑止と云へば若君腹にすね兼ね、汝ぢはたつた今まで梶原と誹りながら、梶原同然の悪口我れに向つて推參千万、サア今一言云ふて見よと太刀に手と懸け給まひける、ヤア最明寺殿より外大將軍はなさものと、御身も我れも同然鮫鱈とも河豚魚とも云ふて見せんと罵しり合ふ、マ、鮫鱈武者の切つ先受けて見よと抜き放なし給まへば、土肥佐々木なんぞ

云ふ一騎當千の嫡子ども、一度に太刃とはらりと抜真中に追取込め、我討捕んとひしめく所と友平絶つて、ア、く勿体なし、大事の前の御謹み最明寺殿思召も穩便ならずと、御佩刀納させ、罷立て經景鎮まり候へ少人達と、館に御供有ければ、光成の使者經景が小腕取て引出す、逆櫓の遺恨留まつて今魂ひに入代り、身は空船の梶原が心と成るこそ淺猿しと寶治二年十一月癸交りの玉殿、雪の下の廣小路一ばいに降る黒羽織、奴が髭に垂氷ゐて奥齒にのじる唐芥子、赤熊の馬標御馬北風に嘶らせ、討て出たる大名こそ最明寺殿の御舎弟式部の冠者時定公と勢ひ猛なる供先と、いのつらしき頼冠り若黨二三輩引具し、押割て通らんとす徒士の者供引捕へ、コリヤ盲人め冠者殿と見知ぬると、頼冠ひつたくれれば佐野の源藤太經景なり、馬上より聲と懸けヤア經景の時定直に尋ぬべし、つゝと是へと呼付確たと睨で、御分は身代不相應に輕々敷く忍ぶ体は不審し、兄最明寺坐禪に籠りお在る内は此冠者が執權なるに供先割るは緩怠者申し分に依て屹と過怠に吩咐んと、返答悪くは鎧の端にて蹴殺し退んず面色なり、經景土に跪跪と御答至極仕まつる、聊の慮外に候はず、直に注進申上る儀候ゆる、人目と忍び右の仕合せ眞平御免蒙るべし、扱御注進の趣きは先某

が兄佐野の兵衛政経、先年人知れず闇討に討れ其子源左衛門經世は、阿房拂に仰付けられ  
 兄政経が遺跡佐野の庄此經世に給はつて、奉公の忠と勵候、然に紅が谷經世が屋敷某望み  
 やせ共、御用の場所とて吝惜あり、此度故もなき者にさへ、彌が上に屋敷地と給はり、多  
 年懇望の我等には代地の御沙汰にも及ばず、經世が屋敷と若君のお花畑に成り拙者は鼻と  
 わく斗り、國と保つ者は一步の地も功ある武士に與へ馬の用に立てこそ、何ぞや若君の  
 未だ乳香ふ飯喰ふと、義經の再誕とはこのひの僧正に譲りされ鎌倉の御家督とて大分の  
 地と花畑に費やし、若しもの時に草木の花が鎗一本の役には立たず、當家に於いて天下の  
 執權には、誰あらふ冠者公と諸人舉つて申す所、殿の嗣せ給はんに誰がぐつとも申すべき  
 、左ればこそ天女丸、殿とけふたく思はれ、最明寺殿坐禪の内に責亡ばさん催はしにて、  
 則ち物語の師匠宇都宮友平、安藤左衛門光成以下と語り合戦の用意事急候、旁々御油  
 断あるべのらずと眞のい様にぞ説しける、冠者は彼に物が付て云するとは夢にも知らず、  
 馬より飛で下り、チ、く神妙の注進大慶く、脇のらさへ齒痒きに我れに油断あるもの  
 め、扱らぬ證據と見せ申さんと首に懸たる錦の袋と取出し、是ぞ辨財天先祖に授給はらし

三ッ鱗の家の旗先此主に成るらは北條家の大将なり、御分は急ぎ此旗と伊豆の御崎へ守奉  
 まつり、宇賀の社に込置き湊の船場に關と据ゑ、渡海の船と留むべし追付け後より加番と  
 して、佐々木の十藏廣綱と遣はさん、我鎌倉と持堅め安藤宇都宮に閉門せさせ、天女丸と  
 押籠置ん兄貴の坊主が咎めなば、静謐の世と騒する謀犯人と訴たふべし我願ひ叶ひなば屋  
 敷などは輕いこと、一ヶ國は極つて其外に兼國望次第、辨財天も照覽あれ虚言なしとぞ語  
 りける、經景思ふ圖に諷言し是殿、とてもものに其兄貴の坊様ぐるめにして遣ふとは思は  
 れぬ、ヤレ夫と高ふは云ぬこと心に計り持て居よ、向後御邊は一方の大将と頼むのらは、  
 威勢と付る褒美として一家となつて北條の家の定紋譲るとと鱗と付たる鱗形、北條殿や庖  
 丁殿お懸らん末こそ危うけれ、去程に式部の冠者時定は天女丸時宗と無体に押へ、謀犯人  
 と號し松が岡の彌勒堂に取押籠め重代の赤旗と伊豆の御崎に隠置き、山手には二重三重  
 の柵とふり、海手に數箇所の物見番、龍禪崎の船場には佐野の源藤太經景佐々木の十藏廣  
 綱役所と構へ、干潟遠く逆茂木引き渡海の船さへ停止あれば、漁村の賤も鮓釣り鯛釣り兼  
 ねて網の手と、他に海松と擔さする蟹もさの手と打休み、波の遊魚も飛ぶ鳥も通ふ方なき

要害なり、折しも夜更け波静りに番所の篝火しめり行ば、天女丸は漸に圍みと免られ忍び出で、宇都宮たゞ一人語りひ濠に紛れ付き給ひサア時分は好きぞ友平、兩番所も鎮まつて海上は引潮なり、命限りに渡り越し向ふへさへ着たらば、番の奴輩切敷し旗と奪ひ返すべし、よし仕損じて死する共取返さずは生甲斐なし、死るに極めていざ来いと、飛入らんとし給ふと宇都宮抱き止め如何に引込ればとて思召ても御覽せよ、三里に餘りし海の面、歩渡りの人間業に叶ふべき様候はず、潮に溺れし御死骸と雜入原に引索され、耻辱と云ひ讓者み利潤付くといひ、旁々鹿忽の御振舞御思案のいる所と、制すれば齒嚙となし、エ、口借し是式の事と治兼ね、父最明寺殿へ言上し坐禪の妨げ御大願と破らんは、後代までの誹りの種親に離れし我ならば冥土へ間に遣るゝのと嘲けりは歴然たり、エ、翼もがな鱈もがなと平砂に兩足踏込んで拳と握りはらくと無念涙のせきあへず、友まをばせる小夜千鳥驚く方の人足や、年の頃は十八九初夜の月さへはや西東、さまよふ振にて人よとちらりと見付足早に逃んとす、宇都宮走寄りむすと捕へ、こりや女め必定此番所へ呼れし傾城じやな、我々此許に有躰と番の者に知る振と見ぬた、是ら直に汝が宿へ歸ればよし、

番所へなぞ入ならば海へ切てつゝはめん、サア如何じやと感しける、ア、つがもない何の其様妾等である、此浦のうづさの颯、此頃御法度厳しう若和布一本海松一株採る事ならねば、朝夕の迷惑さ夜は番衆の間間もとそつと見に来たばつり、はんに男に手と探れた一期の始にあた胸忿な、跡がひりくひりくする、那の若衆様やんはりと締直して貰ひ度と浦の蟹さへ常代は只は通さぬ慣しなり、友平是は屈竟彼奴と嫌して海の淺瀬と間んと思ひチ、免せく知らなんだ、汝に問たい事がある返禮には錢やらふ隠は取まい、サアあの濱へ一寸来いと手と探れば、エ、錢取て濱へ行やうな者じや御座んせんとしてひんとする、若君見兼て是々蟹人、我々は念願あつて向ふの御崎へ忍ぶ者、此本望達すれば蟹のうづさも漁船も前の通に自由なり、此灘と越様わらば何卒指南は成まいる、別あゝ事よと曰はへば推量やしたりけん、何が扱お尋といひ世上の爲包まん様はなけれど、昔より此入海歩渡は沙汰にも聞ず去ながら、如何なる千尋の大海にも、汐頭汐別上り沙落汐、片汐諸沙女夫潮投潮脇潮なんぞ、潮合ひと見てるうづさの蟹の龍宮城へも入なれば、叶はぬ事共申難あれ、月影の二に割て一筋に尾花の靡く如くなる波の別れの末こそは蟹の通ひの汐路



なれと、指差してぞ教へける、若君も友平も今は案内御坐んなれと裾の、げてさんぶくと入給ふ、喃々假令沙路覺ゆても蟹ならぬ身で危険いこと、怪我遊ばすな先あへとといへ共耳に聞入ず、三反計りは足も立つ、次第く波は高し底深し、流石の友平方なく、先々後へと御手と探り元の磯邊に打上りお腰の物に水入ぬら、やれ先お足と拭ふて進せて呉れ、頼むと捲り手に袴と絞る計りなり、それく人の云こと聞分なふ情の強はいお身の損、若衆様のお足拭ふにも手拭はなし私が、鹽焼衣お慮外と上がい下がい膝くさにして、足の甲のら足首まで、く和のなお肌やな、此許はお膝此許は太股内股の、此もよなら私や小町お前は四位の少將で車の湯にと抱付く、若君飛び退き慮外者めと、柄に手と懸給ひしと友平しばしと止め參らせ、是女那方は鎌倉殿の若君、今度の騒隠れなれば知つらん、汝が力に海と越ゆ御旗と奪ひ參らせなば、財寶の願ひは云に及ず、假令一夜のお情でも相違有ととやさる、蟹嬉げに打笑て、さこそは見付參らせたり誠に賤き蟹の子のお情とは憚りあり、鱗形の御紋付のお肌着一重下されば世の思出に肌に着け、千里萬里の荒海なり共波と潜り水と分るも蟹の業、奪返して奉つらんとやせば若君宇都宮、それ

易いこと是なり共と表紋の唐絹に唐縫したる柳裏ひらりと脱てたびければ蟹は戴き打のづき岩先に断上り、自らは小袋坂金龍水の池の邊に年経て住ものなるが、江の嶋の叔母若より給はつたるはだの産着と悪人に奪れ、五体の力盡はてしに今北條家の生鱗九萬九千の飾と成つて、神變神通自在と得せつながら間に彼旗と奪ひ取て參らせんと、逆巻波に飛入て分行く潮八重白重百の媚ある面貌に尾は二十尋の金の鱗月に映じて游行く、辨財天の眷屬の旗と守の神と思ひ白波走りしは帆懸し船の如くなり、波の音に目と覺し番所騒げば悪のりなんと、友平若君身と潜め磯山陰に忍ばる、源藤太經景木戸と開せつと出で、風もなきに波の音千鳥の聞るは、天女丸が方より水練の忍びと入たるに疑がひなし、すはく沖に物こそ見ゆれ仙術魔法の者なり共、我馬上に及ばんやと元來武勇第一の梶原が精靈入交たる其験、弓箭の本意此時と順て物且堅めける、此許に佐々木廣綱は相番ながら若君に兼て心と寄し故聞ぬ顔にて控へしが、經景が打立よし共に防ぐ風情にて、しやつ妨げんと馬よろひ華麗にこそ出立たれ、經景其夜の装束は無垢禰地の直垂白金の摺付小札、白糸にて菱綴したる斑威の鎧と着、くろぼろの矢の廿四差たる箆のさかひ、本重藤の弓持

つて、雨夜と云し、鏝月毛の聞ゆる名馬に乘たりけり、佐々木が出立物具は紅の裾濃に所々四ツ目結びすつたる直垂卯の花と黄に返して、袖印付けたる鎧筋ざりふに塗りのく矢、吹寄藤の弓持て、長月といふ黒栗毛の馬にぞ乘たりける、二人互に劣じと引懸引懸打たりしが、経景は佐々木に一反計り進んで海へさつとぞ打入たり、廣綱先と越れじと聲と掛て経景殿、冬海は潮早し腹帯が延て見えそふぞ、深處になつて鞍のやさん締給はぬのと呼ばれば、経景さもとや思ひけん手綱と鞍のものがみに捨て、左右の鎧と踏すのし弓絃と脚へ腹帯と解て引しめくしむる間に廣綱すつと乗抜て、佐々木が家のこつはふ御免あれと云儘に、さんぶと打入半町ばのり先に進んで游がせける、ねつたい佐々木殿高名せふとて不覺ばし、給ふな、此頃りののづきも絶ぬ海松が茂つて見ぬ候、且の足纏はせて誤ちあらん笑止さよ、心得られよと諷のれば、チ、親にて候高綱が、傳へし習ひあんなると、太刀と抜て水底と切拂ひくさんづにどうぞ乗下り、手綱繰上げ聲と懸け馬に力と添へたりけり、冬も中旬の浦吹く風磯打波と巻上て水やそらく掻曇り、天も凍て霰散り雲の足さへ早潮に底の岩角巍々として海上遙に穢々たり、是は一騎當千の高綱が嬌々なり、彼は文武二

道の武者梶原が魂魄なり、何れに勝負あらばこそ廣綱進めば経景續き、経景進めば廣綱續き響みと引揃へ、押並て渡すとすれば切付太腹どうくく、波鞍壺に打越てのだめがたに突流され、半月に乗る所もあり、馬の草分けむながひづくし、さらくくさつと乗分け乗割て、一文字に行く所もあり、高さ波には一鞭呉れて、あいゝ聲に躍越ぬ低き波にはしつと、あて、手綱と繰て乗下し渦巻波の右どもゑ、左どもゑにくるくく、るりくの輪乗に潮と巻はぐし、巻戻巻くづし蹄に蹴立る潮烟り、隔の霧と立塞つて山さへ見ぬぬ海の面、星と目當の諸鎧息もつがせず踏もためず、負じ劣らじ我先にと喚叫けんで渡したり、経景馬や劣けん馬上にや疎のりけん、三反計り乗後れ淺處に駒と驅寄て、漂流ふ浮木に手と懸て一息ホット吻たれば、佐々木は沖の流洲に駒と控へてくらゐに突立上り、悪う候経景殿伯父盛綱が藤戸の一流、海とば斯ぞ渡すものお先へ參る御免あれと、手綱のいくりに乗出す、陸には兩家の郎等組子、波打際にかりひたり、片唾と呑で控へしは前代未聞と云つべし、斯る處に式部の冠者時定、百騎ばのり引卒し喚て來たり、ヤアく兩人天女丸こそ宇都宮と語ひ何處共なく落失たり、方々が勢ひは如何なるもあぞと呼はつ

たり、經馬馬上ながら、扱は只今此海と遊越すもの候故、兩人の如く追懸候、疑ひもなく天女丸はつめ引提參らんと、駒の頭と立直せばやれまてく年にも足ぬ小丁稚、彼奴等が分にて遊越こと思ひも寄す、夫は必定水練と入て、其身は此磯山に隠れ居るに極つたり、我々山と狩出し濱端へ追出さん、兩人海に下立て射取や射取れと下知すれば、承はると經景弓と矢探て打番ふ、佐々木もアツと答へながら誤まつ振にて冠者めが、たゞ中と一筋と思ひ込でぞ控へける、時と移すな狩出せと、打物援連松明振り谷よ峯よと狩立つる、友平今は是までなり濱の手へ落給へと、暫時支ゆる其隙に若君磯邊に走り着き、後と見れば時定のた手矢はげて追驅る、今は詮方あら磯に沈まば沈めとさんぶと入り、渡るともなく行ともなく陸地に立る如くにて、四五寸沖に浮み出で足下と見れば不思議やな、蟹に與へし上の衣波の上に漂着して、若君と救ひ立てたるは宛然笈の如くなり、沖には經景矢尻と磨き寄ば射留ん其勢ひ、陸には人衆切先揃へ返さば討んと哄さしは、火境に落し罪人の取付く藪と黒白の鼠としつて惡龍舌と振るといふ、苦界の譬に異らす遁れつべうはなありけり、しつし所に二階堂入道旅装束にて息とばのりに驅付け、暫時くく串の仔

細は存せぬ共、是は大事の御使私しの儀に有す干戈と止め聞給へ、今度某大殿の仰と蒙り、奥州高館に下り判官殿の御墓と祭り淨め、同く頼朝より御勘當の御教書と取歸り仰に任せ只今焼捨申のらは御勘當の罪消て義經の靈魂安執はれ、若君の御身の上武運の御祈禱たるべしと、御教書の封と切下人に持せし正火と探て、打掛れば炎焰々と、天に通じて名將の順逸精智悦び給ふ其驗、白金の翼ある白鳩虚空に舞下り、天女丸の懐に納り入ぞ不思議なる、判官の虚名晴ければ謠者の勢ひ力も弱り、梶原が亡魂冥々として失てけり、經景心茫然と夢の現つる空蟬のもぬけの殻の如くにて手綱とる手も覺ぬなく、平首に抱き付く馬も足と立のねて、波に漂よひ浮ぬ沈みぬ、泡沫の安房の浦路に流れ行く、冠者奇つてヤア物々し、假令生れぬ前生は判官にもせよ辨慶にもせよ、現在にては我甥なり叔父に向つて逆心のまへ、國と毀ひ家と破る惡黨征罰何の憚りあらん、船と浮べ熊手にあけ、搦捕れと驅廻り、どつと蘆邊に下ひたる、兵衛無雙の義經の靈氣と感せし天女丸忽然自然の妙と得て、波も潮も事とせず、巖の險阻にひらりと飛び、磯の松が枝躍越ぬ大勢に向ひ、天狗に授かる飛行の術鬼一が傳へし一卷の、太刀風さはぐ虎の卷獅子奮進虎亂入前と拂へば後

に在り地と擲れば霞に入り、あけるふ稻妻水の月宛然飛鳥の如くなり、差もの大勢一人に  
 切立られ冠者も數ヶ所の痛手と負ひ、命斗りと免れんと水練は心得たり海へとうと飛入て  
 伊豆の御崎と心差し援手と切て遊ぎける、沖の浮州に扣へたる佐々木の廣綱向ふ様に駒乗  
 入れ、天道と守る廣綱は天女丸の味方ぞや、尋常に腹と切り給へ左無くば佐々木が矢先に  
 懸て後世吊はんと云ひければ、冠者大聲上げて泣出し夫は餘り酷い仕様、如何に水と得た  
 ればして三里五里は游がれず、今の間に鱈の餌食と成る我身、些少の命と助てたも、佐々  
 木殿廣綱殿と立遊して拜けり、佐々木返答にも及ばず中差採つてのらりと番ひ兵と切て放  
 つ矢に、鷹のたばねと射通されまつのい様は別返し底の水屑と沈むと見て、残る軍兵うら  
 崩れして皆散々に逃散ける、時に海上漣波立て月清々たる波間より紫金色の耳ある蛇潮と  
 卷來る其音は和琴の調の如くにて、磯邊の松に攀登りく梢と啣へ尾と垂て鱈の衣とはら  
 はらく拂ひのこすや三枚は家の紋付く旗の手の融々と懸らせ給ひけり、若君三拜恭敬  
 して戴き納め歸るさの道の用心、佐々木は馬上に先と打てば、後と押さへて宇都宮君判官  
 の再臨なれば二階堂は辨慶と敵の捨たる鎗長刀突棒刺又熊手かつとり打撥げ、夜は白々と

七ツ道具わけ六ツ、五ツ五代の北條家四ツ世の中三ツ鱈尾鱈と付けてぞ語りける

最明寺殿道行

行衛定めぬ道なればく、越方も何處ならまし是は一所不住の沙門にて候、我此程は信濃  
 の國に候ひしが餘に雪深く成り候程に、先此度は鎌倉に上り坐禪に籠り春になり修行に出  
 ばやと思ひ候、蝶の翼の白粉と草にこぼして梢には鶴の霜毛と脱ぎ懸る、雪は花より花多  
 き木曾の三坂の谷風は吹けども袖に寒のらで、名も妬ましき風越の峯の吹雪を身には染む  
 、身は墨染の墨衣さるがら雪の一筆鳥尾羽打られし修行の旅、佛恩報謝の爲にもあらず自  
 生菩提の道にもあらず、淨世の民に覆ふかな覆へを洩る竹の笠似合ぬ身にも引締て、しや  
 んと召たる御有様ありがたし共頼み有り、幾重越しても信濃路は未だ谷峯の大井山人里遠  
 く離坂筑摩の川に波呼ぶ聲も嵐に埋れて、笠で招けば笠の端に敵たばしる、垂氷のらく  
 輕井澤見上れば朝ぼらけ淺間の嶽に立烟その一筋と種々に霞に詠じ雲に見て歌人は思と述  
 るとのや、我は烟の立居にも民の籠の賑ひと天に祈の千早振る雪と袂に幣帛とれば雪は五  
 穀の精たりと、唐土人も豊年と祝ふしるしのあれくく、地下も在所も賑々福々福島の

賤の妹脊の妹は粉摺る脊兄は米搗く麥搗く餅搗く〜望月の里をよむ迄であるといとん〜サ  
 アとん〜サアとん〜と杵の音確氷峠に差懸り、上れば下る谷川の凍ぬ程は聲立て春も  
 近しと岩間水木々の木葉を吹溜て、けふ山姫の衣配り物裁よしと色々の錦裁なる板鼻の宿  
 と麓の坂本や諏訪の湖水猶呀て鴨や鴈や鶺鴒の番も熊金も下り居る程は押なべて、皆な白  
 鷺と深山下風がさら〜〜颯と吹てはばつと群立ち拂ふ翼に、自がとり〜色品と別て見  
 せたる雪の空残の月は浮るめども兎はなづむ厚氷驛路の馬ぞなみ走る、走る馬にも鞭鎧武  
 藏も近き秩父山、八王子山の山賤も外山の瓜木樵盡し、雪とくゆらす炭籠や深谷の宿の深  
 々と冬籠せし一枝も、春待顔に初花の咲のけんとや一二ののけ熊谷村にさのづきの佐野の  
 傀儡達着にて強止めんと詠置し古歌と吟て凌共雪の寒のさのみやは佐野の渡に着給ふ宿も  
 がなと夕顔の夫には有ぬ小家の軒椽疎に傾さし雪折竹の上簀戸や、主人は貧女と思しさが  
 年も三五の玉帯ひさしの雪と搔落し落せば襟に袖口に首筋元にはひや〜〜、ア、冷たや  
 と手と拭くも下賤近うして尙優し最明寺殿籬に竝立み、ヤ々お女郎越後より下總の檀林へ  
 通る所化の僧今日の大雪先へも後へも参り難し簀子の端に只一夜頼ますると有ければ、ハ

アお易い事乍ら主人の留守に私 が泊まするも如何なり他方とお頼なされませかいとし様  
 やと愛嬌ある、ム、ウ主人のお留守とは扱は貴嬢は御内衆の、イエ〜主人は私が姉尊此  
 頃他國致されて主人と云は姉様、チ、然ば貴嬢も主人同前江口の君が假の宿に心止なとヤ  
 たは、夫は色ある優法師炭の折の木端のと云様な此坊主、色事の用心ならば氣遣ひある  
 なと曰へば娘も莞爾と打笑ひ、尤も色と云物は容貌とは云ひながら如何やら時の機會では  
 別げでも兎口でも油断がならぬと走り込む、天下と裁判く御身にも此返答は行暮て竝立み  
 給ふぞ殊勝なる、世の中は何の經世が留守住居妻は手足も土大根蕪るぐなも摘持て歸る山  
 路の白妙に、ア降たる雪のな如何に世に在る人の嘸面白ふ見給ふらん、夫雪は鷺毛に似て  
 飛で散亂し人は鶴毳と着て立て徘徊すと云り、然ば今降る雪も元見し雪に變らぬども、  
 我は鶴毳と着て立て徘徊すべき袂も朽て袖狭き細布衣、陸奥の今日の寒さど如何にせん  
 わら面白からずの雪の日やな 最明寺殿是こそは以前の女が姉ならめと、喃々主人の御方  
 に候る御賢の如く旅僧の身ね宿の御無心申せしを主人のお留守とありしゆゑ、待設けた  
 る御歸り前後と忘する大雪今宵はりの御惠頼み入るとぞ仰せける、實に〜易き御事な

が見苦き賤が伏家何とてお宿と申べき、イヤ／＼旅と云三界の家と出たる世捨人草の蓆  
 も我爲の玉の臺と難有し是非に一夜と曰へども、那れ御覽せ我々夫婦兄弟さへ住居兼たる  
 体なれば泊め申さん様もなし、是より十八町彼方に山本の里とやて好き宿驛の候へば暮ぬ  
 間に一足も急がせ給へと云捨て庵の内へぞ入にける、あらさよくもなや由なき人と待つる  
 よ浮世の人の情なきも我過まりと顧みて、歩み勞るばりなり妹の玉章涙ぐみ、いたはし  
 や御出家様最前お宿と有しのも姉様の心如何と存じ外に立せ置ませし、斯く零落しも前  
 世の因果切て出家に備遇せば經世様の武運も開け後世の爲にも悪い事なされた様にはよも  
 有まじ、泊てさへ進ませば別に馳走は入まいと私や思ひますと云ひければ、チ、優しや  
 能ど氣が付た昇程の大雪に遠くはよもやと表に出で、喃々旅人お宿参らせふなふ餘りの大  
 雪に申と事も聞ぬぬよの、悼しの有様やな元降る雪に道と忘れ今降雪に行方と失ひ、一ツ  
 所に佇立みて袖なる雪と打拂ひ／＼し給ふ氣色古歌の心に似るぞや、駒止て袖打拂ふ蔭も  
 なし狭野の渡の雪の夕暮斯様に詠しは大和路や三輪の先なる狭野の渡、是は吾妻路の佐野  
 の渡の雪の暮に迷ひ勞れ給はんより、見苦く候へど一夜は泊り給へやなふ旅の僧旅のお僧

と招られて、夫は嬉しき志ざし假の愛世に假の宿荷且ながら值遇の縁、一樹の蔭の宿も此  
 世ならぬ契りなり夫と雨の木蔭是は雪の軒ふりて浮寝ながらの草枕是へところは請じけれ  
 、イヤ是玉章折角お宿申ても供養致さん物もなしお淋しおらふが如何せふぞ、妹様幸ひ粟  
 の飯さもしけれどもお慰みと櫃取出せば、ア、其様な物何のいの折節九獻もなしお菓子  
 無いのと夕霜の置ぬ棚とや搜すらん、是御兩人旅にしあれば椎の葉に盛とのや粟の飯とは  
 日本一の酬味御馳走に預りたしと曰へば、ヤレ／＼夫はお嬉しや切ては何も奇麗にと萩  
 の折箸土器も由緒あり氣なる響應なり、耻しやお僧様此粟と申物往古我夫世に在し時は歌  
 に詠み詩に作りたるよこそ承まはれ、今は此粟と以て命と繼ぎ候ぞや、實おや蘆生が見し  
 榮華の夢は五十年、其邯鄲の假枕一睡の夢の覺しも粟飯炊ぐ程ぞのし、あはれや實に我々  
 も打も罪て夢にも昔と見るならば慰む事も有るべきに、喃御覽候へ住られたる古里の松  
 風寒さ夜もすがら寝られねば夢も見ず、何思ひ出の有るべきと坐に涙と浮べける、旅僧も  
 惘然催され墨の袂と絞るゝ更行くまゝに夜寒さ増り冷渡る何との焚火に焚てあて参らせん  
 や、思ひ付たり我良人世に在し時鉢の木と好き數多の木と集め持れ候ひしと、斯様の体裁

に衰へ云れぬ貧の花すきと皆人々に参らせせて、今はやうく三本残つて那の雪と持たる梅  
 櫻松別て良人の秘藏なれども、今宵の響應に是と焚火と立んとすれば、暫時く是は思ひも  
 寄ぬと御心志しは有難けれども、重ねて世に出給ひての御慰み無用になして給はれとよ、  
 イヤ逆も此身は埋木の何時の盛に何時の花何時の時節と待べきぞ、只徒らなる鉢の木と  
 御身の爲に焚ならば是ぞ探菓汲水の法の薪木と覺しめせ、しるも誠に雪降て仙人に仕し雪  
 山の薪木斯こそ有らめ、我も身と捨て人の爲の鉢の木切るとも、よしや惜ららじと雪打拂  
 ひて見れば面白や如何にせん、先冬木より咲初る窓の梅の北面は雪封じて寒さにも異木よ  
 り先立てば梅と切やそむべき見しと云ふ人こそ愛けれ山里の折のけ垣の梅とだに情なしと  
 惜みしに、今更たさうに爲べしと兼て思ひさや、櫻と見れば春ごとに花少し遅ければ此木  
 やわぶると心と盡し培養しに、今は我のみ詫て住む家櫻とくべて火櫻になすぞ悲しき、  
 扱松はさしもげに枝のため葉とすのしてあり、あれと植置し其甲斐今は嵐吹く、松は元よ  
 り煙にて薪木と成り理りや、切くべて今ぞみの守衛士の焚火はか爲なり能く寄て煖り給  
 へや、等閑ならぬ御深切寒さと忘れ肌は彌生如月の暖氣にあたる梅櫻花みる心地候ぞや、

扱しも如何なる人の御行末男あるじの家名字は何と申候ぞ、自然の時のお爲にも何の苦う  
 候べき聞まはしと仰せける、ア、人がましや無い往昔と名乗も流石面ぶせ去ながら此上は  
 何とのさのみ包むべき、是こそ匠野の源左門経世が成る果て哀と御覽候へや、扱も過に  
 し仁治二年鎌倉は常最明寺殿の御兄君経時公の御さばき、夫の経世は將軍の御供して在京  
 の其跡の事、経世が父我爲には舅佐野の兵衛政経故も無く人知す暗討に討れ給ひしと、聞  
 と等しく我人は取て返し下向の時一族の議に依て鎌倉へも入られず、道より直に御勘氣と  
 て所領莊園召上られ経世親子が累代の知行一所も残らず、叔父源藤太經景に押領せられ生  
 甲斐もなき此有様、親の故も大方は推量に紛ひなれども實否と糺し討ん爲、折々他國に  
 身と寒し跡ふり隠す雪の庵雪は春にも消残る、夕も知ぬ武夫の身の上憐れみ給へやと、清  
 然とこそ泣居たる、實にく夫は聞及びたる物語何とて鎌倉に上り其御沙汰は候はぬぞ然  
 ばとよ、夫婦も左は存すれ共運の盡とて最明寺殿法華堂の坐禪に籠せ給ひ、萬機といろは  
 せ給はねば天照神の岩戸に籠り月日の光隠れし如く理非の分れん様も無、去ながら斯零落  
 ては候へ共取傳へたる梓弓、矢竹心は張詰てあれ御覽候へ是に武器一領長刀一枝、又あれ

に馬とも一疋繫て持て候、經世常々申せしは只今にてもあれ鎌倉に御大事ありと聞ば、此  
 具足取て投擲け鉢たりとも長刃搦込み、瘦たりともあの馬に掛鞍置てふはと乗り女房に口  
 探らせ、一社に走參し御着到に連なつて、扱合戦はし始まらば敵何万騎ありとも一番に  
 割入り、手に立つ軍兵より合打合ひ分取高名譽れと顯し、一方と責破り君の御馬の眞先  
 驅け思ふ敵の大將とむんずと組で差違へ死なんす身の、エ、口惜や此儘ならば彼らに飢寒  
 に迫り死なん命なんぼふ無念の事さふぞと姉妹のつばと伏沈み泣き口説こそ道理なれ旅僧  
 も至極の理りに衣の袖とぞ絞らるゝ、よしや浮世の浮き沈み斯ては果てし只頼め、我世の  
 中に有ん限はの誓ひと願ひ給へやと詞と殘し殘る夜も明方近く隙白く雪もり歌は然ばとて  
 暇すと出給ふ、姉妹假の宿ながら是も御縁と覺し召し春お下りの折柄は立寄り夫にも逢ひ  
 給へ命の有ば我々もと、然ば然ばの御名殘自然鎌倉にお上りあらばお尋ねわれ甲斐と敷  
 はなければ公方の縁になりやさん、御沙汰拾させ給ふなと云ひ捨て出舟のともにも名殘や  
 惜むらん、已に今年も臘月下旬最明寺殿の御臺所松下御寮の仰せとして俄然希有の御布令  
 あり、晝夜の早打ひまもなく近國殘らず觸にけり、喃急がしやゝ只今我等當國へ下る事

餘の儀にあらす、扱も最明寺殿天下の政道と考へなされん爲め、坐禪觀法の方丈に閉籠り  
 近習外様の侍士は中に及ばず、御臺若君へも御對面なく禁足なされ御座候、此隙間と僥倖  
 とや思はれけん御舍弟式部の冠者殿佐野の源藤太と語り、謀犯と起し遂に其身も亡び源藤  
 太は落失せ漸く事治まつて候、斯様の騷動の出來するも最明寺殿館に御座なき故、國に  
 執權なさは人に魂魄なく家に柱なく温飢に汁なく繪に酢のなきが如しとわつて、辱けなく  
 も御臺所坐禪と御出なさる、迄は最明寺殿御名代との御事にて、女中の御身に執職の装  
 束と召れ御側には諸大名の奥方、何れも男の立立にて非番當番ひまもなく、政道執行なひ  
 給ふこと往昔の尼將軍に相も變らず候、左はやながら人の口には戸が立られず、雌雞が時  
 とつくるの鎌倉殿はとゝの、じやなど、嘲けつて、すは大事と云時に勢が付る物物は  
 試しに集て見よと、阪東八ヶ國の諸侍士悉皆く物の具して急ぎ鎌倉へ御參あれ、仰付けら  
 るゝこと有りと觸させられて候が、餘りに諸軍勢とそく候程に何とて遅なはるぞ催促致せ  
 との御使と承まはつて候程に急がばやと存じ候、ヤア、何とやぞ夫へ御參りあるは武藏  
 相摸の御入衆とや、先は早さごと急いで御參り候へ、あれへ見わたるは上總下總の御人



衆じやヤレ、奇麗美やのなる出立のな遅いと、御事御急ぎ候へ、イヤ是へ見わたるが常陸の國の御人衆の、道理で真先な武者が黄楊の棒と引提げたは常陸坊と云意の、一段と華美な出立いづれと何れとヤされぬ、此國々へは最早参るに及ばぬ足と助つた、ヤア未だ上野下野の御人衆がお見ぬない、先上野へ参らふ何と云ふ是へお出あるが上野の御人衆じや、ヤレ、嬉しや参るに及ばぬ今までの出立に劣らぬ夥多しいことゝな只一刻も急ぎ候へ最早悉皆く御参り候、我等は先へ罷歸り各々鎌倉へ御着あるよし申上ふと存する、皆々聞れ候へ關東八州の諸軍勢走まで御着候ぞ其分心得候へくと觸て通りし勢ひは勇々しくも亦華々し

女勢揃へ

昔昔の朱序が母千余人の女武者と領じて襄陽に城と築き賊敵と防ぎ夫人城と名付しは、上代異朝の賢婦ぞらし鎌倉の御臺所せんひ松下禪尼の風と慕ひ、自身執権のよだつぞと、烏帽子ぎは氣高く水干の衣紋掻繕ひ、美精好の長絹黄金造りの御佩刀式目所の上段に悠々と坐し給へば、左右は白齒のお腰元島田解いて若衆鬘廊下傳ひの長袴はなと並べし如くに

て御太刀の役調度掛け作法正しき廣廂諸大名の御前方何れも男の出立にて、面々殿御の役々の座並亂さず伺候ある、第一の座には都八原陸奥守重時の北の方おれんの前、連理の若松若竹に比翼の、鳳凰の草の縫物したる薄直垂黄裙濃の袴とし横幅廣く結ばれしは、此月帯の御祝儀と言葉もぐさつ、まじさ袖掻合せ着坐ある、次は秋田の城之介義景の御簾中、おりう御前はせい人の子の親なれど何某の中將殿の乙娘烏帽子なれたる黛に戀と染込む狩衣のつも長々と結び下げ裏紫の藤袴男染たる摺足も爪先そつてぞ見わたにける、是も同風折に詩繪の飾太刀佩たるは、足利左馬頭の御内室お吉の君、此春嫁つて人中と忍ぶ文字摺忍ぶ布折目正く着こなせし、素袍袴の、りだちもやはくとせし挨拶の何れも是はお早ふと物静にぞ伺候ある、次は佐々木隱岐の入道の息女お百の姫、目結の直垂五色の糸にて刺綴し嫁入盛りの花盡し、袖の重ねに匂はせて大人くろしき懸烏帽子行儀正しき割膝に袴の襦の高ければ嘸紅の下の紐の裾や分れん心懸さよ、同じく續て四條藏人の奥左近のお方、金紋紗の狩衣薄色の指貫白銀作りの太刀横たへ、寺社奉行の座にぞ着れける大目付は宿谷の左衛門が女房おつげの前、是も二人の子持筋に鶴龜染たる素袍袴うち刀さしはらし、四

邊所と見廻して、目と顔の色にお役は嘘と知れける、是は名越金吾の後家熊千代が母おさいと云は、年ばいも磯邊の善知安方の子と後見て身と捨す、髪は切ても何の其我子の末も君が代も万歳烏帽子引こふで、御披露所に着座ある貌もつやくはやくと老て二度若後家や、昔の蝶の吸残す花の露浮く斗りなり、次は山名の惣領娘からくは今年十八歳土岐の二郎が妹おふりと云も脇詰の、年ばいねど格好の太夫のお内儀おさち御前、思ひくの太刀狩衣大納戸小納戸進物所御膳番役所く、に着座ある扱其外お臺所の彌惣が女房、圍爐陣の間の加藤が女房おはいおこん、料理人の三太が女房お鍋の前油奉行蠟燭奉行酒奉行の彌吉兵衛が女房お樽の前お前、茶道坊主の珍齋が妻お茶々の前に至たる迄、其品々の男出立直垂袴表布衣素袍長袴切袴へいれい白張たいのうちやう、袖と連ねし粧ひは女護の島とも云つべし、賑はし、とも愚なり、中にも佐々木入道が息女今日の着到承たまはり、中門の扉押開けば東八ヶ國の諸軍勢召に隨ひ參上ある、當國には伊藤の一堂長野清原曾我山越河津大場竹の下櫻井岩永土肥岡崎三崎三浦佐原山原小笠原小山平山字都宮手勢くと引卒し、旗印馬印兜の星と輝らし中門の廣庭より大名小路の極樂橋雖と

立べき塵地もなく、人馬充滿なみ居たり晴がましくぞ見ぬにける、佐野の源左衛門經世は今度の出陣望む所の本望と、ちぎれ具足に鎧刀やせ馬に繩手綱女房は長月のたげ馬の口に引添て、物其數にあらざる氣色さぞ笑ふらん笑は、わらへ所存は誰にの劣るべきと、心はありは急げとも弱さに弱さ柳の糸の、よれによれたる瘦馬なれば打てどもあつれども、先へは進まぬ足弱車の御所の此方に駒と控へて見渡せば、東八ヶ國より集つたる數萬の軍兵是と見て如何なる者ぞ見苦しや、あのさまで此中へ出づらは何事と一度にどつと笑ふ聲凱歌と作るが如くなり、此音奥に聞ゆしのは、御臺所御悦喜あり、自身女の身にて此度の勢揃へ斯様に隨ひ集まること、是皆殿の御威光目出度も若も重ねて如何なる大事あるとてもまづ此如く走來らば即時に敵と追散し、鎌倉は千代萬代心安や目出たやな、いで軍兵に一禮して歸さばやと曰ふ所に裏の門より最明寺殿旅に瘦れし御有様、御臺走はと驚ろさ給ひ扱は坐禪の御出のや目出度上の目出たさよと悦び給へば、若君も立出て御對面こそ賑はしけれ我此度坐禪禁足と偽り誠は廻國行脚して民の安危と窺ひし、其隙間と見て冠者めが即逆天の責め目前たり又天女丸が、武功未頼しく北の方の精遣ひ彼是以て入道が妻子ぞや

と御悦びは限りなし、扱此諸軍勢の中に横縫のちぎれたる腹巻して鍔長刀を持ち、瘦たる馬に女房の口取たる武者一騎あるべし夫婦共に召連來れと御誼あれば、佐々木が娘承たまはり頼て御前に立出る大勢とは云ながら、花紅葉と出立な見紛ふべくも有らばこそ、つゝのくゝと立ちて、是々上意なるを男女ともに御前へ罷り出られよ、經世驚るさ、何と某夫婦御前へ召るゝとやわら思ひ寄すや人違へにても候の、今一度御伺ひ有るべうもやと有ければ、イヤゝゝ如何にも見苦しさ出立の武者一騎女房に瘦馬引せたる者あるべし召連れ參れとの御誼の上は、左様の者は外になし早く參られ候べし、何が扱この上は違背申さん様はなし、實にくゝ女房某が敵また議奏申上召出されて頭と刎られん爲と覺わたり如何あらんと云ければ、マ、よしゝ夫も力なし假令夫婦が御前にて生首と打るゝとも、一度鎌倉殿拜し奉まつる悦ひ一念は潔よく執の敵誼人と三日が内に取殺し、此世の妄執はらすべしいざゝせ給へと打笑ひ、大床差て見渡せば今度の早打お上り集まる兵さら星の如く御居たり、扱御前ひ諸侍士共外數人並居つゝ、目と引さ指と指し笑ひあへる其中に、横縫のちぎれたる古腹巻に鍔長刀女房にのたげさせ、戰慄たる氣色もなく參りて御前に畏

する、ヤア／＼あれなるは佐野の源左衛門経世あ、如何に女房是こそ何時ぞやの大雪に宿  
借し修行白よ、見忘れて有るの其夜の情忘れがたく召出して有つるはと曰へば、夫婦の者  
長刀のらりと投捨てあつと討りに頭と下げ感涙袖とぞ浸しける重ねて仰せ出さるゝは、汝  
が叔父源藤太経景父政経と討て刺さへ累世の知行と押領したる罪科紛れなく、我安房の國  
と廻りし時彼の者落人と成て隠れしと房州の探題に申付け成敗と逐させたりと、御言葉の  
下よりも獄舎の雜式首捕もつて経世が刑に差置たり、経世餘りの右難さ蓋と探ば源藤太が  
首なりけり、這は辱しけなき御高恩冥土の父が悦び現世の我等が本望何時の世に何と持て  
此御恩と報せんと手と合せ涙と流し大床に額と附け仰ぎ居ること道理なれ、尙々仰せ出さ  
る 旨あり近ふ参れと御膝近く召れ、いで汝佐野にて女房が申せしよな今にてもわれ鎌倉  
に御大事あるとならば、ちぎれたりとも其具足と探て投懸け銷たりとも其長刀と持ち扱た  
りともあの馬に乗り、一番に走参るべきよし申つる言葉の末と違へずして参たるこそ神妙  
なれ、先々沙汰の始めには経世が本領佐野の庄三十餘郷返し與ふる所なり、又た何よりも  
切なりしは大雪降て寒のりしと女房が情に秘藏せし鉢の木と切り火に焚き暖たりし心志と

最明寺殿百人上臈

ば何時の世にのほ忘るべき然ば女房に引出物せん、いで其時の鉢の木は梅さくら松にてあ  
 りしよな其返報に加賀に梅田越中に櫻井上野に松枝合せて三ヶの庄、子々孫々に至るまで  
 相違わらざる自筆の狀安堵に取添たびければ經世は之と賜はりて、三度頂戴仕まつり是見  
 給へや人々よ初め笑ひし輩も是程の御氣色さぞ羨ましゝるらん、扱國々の諸軍勢皆御服  
 たまはり故郷へとてぞ歸りける、其中に經世は其中に女房は、悦びの眉と開きつゝ、今こそ  
 勇め此馬に打乗て上野や佐野の船橋取離れし、本領に安堵して歸るぞ嬉しゝりける歸ぞ嬉  
 しゝりける

最明寺殿百人上臈終

明治二十三年十一月八日印刷  
 同二十三年十一月十日出版

(定價金七錢)

翻刻兼發行者

早矢仕民治

神田區宮本町五番地

印刷者

松本秋齋

本郷區湯島壹丁目拾三番地

發兌元

武藏屋叢書閣

神田區宮本町五番地

賣捌書肆

- |         |      |         |       |    |      |
|---------|------|---------|-------|----|------|
| 日本橋通三丁目 | 丸善書店 | 神田南神保町  | 松江堂   | 横濱 | 丸善書店 |
| 神田區表神保町 | 中西屋  | 神田浴集館内  | 黒雲堂   | 京都 | 大黒屋  |
| 日本橋通一丁目 | 大倉書店 | 神田表保町   | 上田屋支店 | 大坂 | 丸屋書店 |
| 本郷區元富士町 | 盛春堂  | 京橋彌左衛門町 | 巖々堂   | 大坂 | 博聞分社 |
| 本郷眞砂町   | 文辭堂  | 京橋尾張町   | 東海堂   | 神戸 | 久榮堂  |
| 神田錦町三丁目 | 武藏屋  | 芝南佐久間町  | 栗ばら   |    |      |

57187

<

~~18~~ 912.4  
~~197~~ C44  
6





9124  
C44  
6

205032-000-7

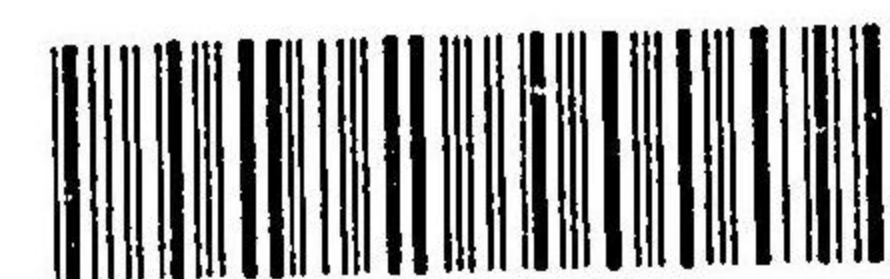
912.4-C44-6ウ

今宮の心中(二郎兵衛おさき)・最明寺殿百人上臈

近松 門左衛門/著

M23

EDV-0024



25.10.27

Sl. 107

C